

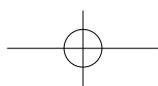
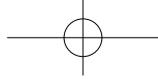
津古1号墳

—福岡県小郡市津古所在遺跡の確認調査報告—

小郡市文化財調査報告書第326集

2019

小郡市教育委員会



<序 文>

福岡県の中西部、佐賀県との県境に所在する小郡市は、これまで市域北部・中南部を中心とした宅地開発や北東・中南部における工業団地開発が相次いで行われ、これに伴い、交通網の整備も着々と進捗しつつあります。これらの開発に先立っては、埋蔵文化財発掘調査が実施されてきており、様々な時代の様々な昔の人々の暮らしに関する事柄が着々と蓄積されつつあります。これらの埋蔵文化財発掘調査で判明した歴史的事象は、当時の小郡における人々の暮らしを復元するうえで大きな役割を果たしています。

今回ここに報告いたします「津古1号墳」は、小郡市教育委員会が史跡確認調査として実施した津古1号墳確認調査の報告書です。本書に収録されている津古1号墳は、昭和43年の宅地造成の際に緑地として保存された貴重な文化財ですが、確認調査が行われていないため古墳について不明点が多く残されており、確認調査の実施が待たれていました。

今回の調査では、津古1号墳の規模や、築造方法について明らかにすることができました。これらの成果が地域の歴史、文化財に対する理解、教育及び学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、長期間の調査にもかかわらずご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に深く感謝を申し上げ、序文といたします。

平成31年3月29日
小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

<例 言>

- 1、本書は平成28・29年度国庫補助事業として小郡市教育委員会が実施した史跡確認調査の報告書である。本報告書を刊行するための整理作業は、平成30年度国庫補助事業として小郡市教育委員会が実施した。
- 2、遺構の実測、遺構の写真撮影は西江幸子が実施した。
- 3、遺構の製図は宮崎美穂子、遺物の洗浄・整理には、佐々木智子、山川清日、永富加奈子、牛原真弓ら諸氏に多大なる協力を得た。また、遺物の写真撮影は（有）システム・レコに委託した。
- 4、遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
- 5、本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T. P.）を基準としている。
- 6、遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
- 7、本書の執筆・編集は西江が担当した。

本文目次

第1章 調査の経過と組織	1
1. 調査の経緯	
2. 調査の経過	
3. 調査の方法	
4. 調査の体制	
第2章 位置と環境	3
第3章 津古1号墳測量調査	6
第4章 津古1号墳確認調査	8
第5章 まとめ	31
1. 津古1号墳確認調査の成果	
2. 津古1号墳と筑後地方における前期古墳の動向	

挿図目次

第1図 津古1号墳地位置図(S=1/10,000)
第2図 津古1号墳周辺遺跡分布図(S=1/50,000)
第3図 津古1号墳測量図(S=1/300)
第4図 津古1号墳トレンチ配置図(S=1/200)
第5図 津古1号墳1トレンチ平面図・断面図(S=1/40)
第6図 津古1号墳2トレンチ平面図・断面図(S=1/40)
第7図 津古1号墳3トレンチ平面図・断面図(S=1/40)
第8図 津古1号墳4トレンチ平面図・断面図(S=1/40)
第9図 津古1号墳5トレンチ平面図・断面図(S=1/40)
第10図 津古1号墳6トレンチ平面図・断面図(S=1/40)
第11図 津古1号墳7トレンチ平面図・断面図(S=1/40)
第12図 津古1号墳8トレンチ平面図・断面図(S=1/40)
第13図 津古1号墳9トレンチ平面図・断面図(S=1/40)
第14図 津古1号墳10トレンチ平面図・断面図(S=1/40)
第15図 津古1号墳墳丘復元図(S=1/500)
第16図 筑後地域における古墳時代前期(1～3期)の墓制の動向
第17図 三国丘陵の首長墓系譜古墳の立地

図版目次

図版1	①津古1号墳全景(真上から)
	②墳頂より地狭帯を臨む(南側から)
	③墳頂から花立山を臨む(西側から)
図版2	①墳丘東側後円部から前方部を臨む(南東側から)
	②積雪時墳丘東側後円部から前方部を臨む(南東側から)
	③墳丘西側後円部から前方部を臨む(南西側から)
	④積雪時墳丘西側後円部から前方部を臨む(南西側から)
	⑤墳丘西側前方部から後円部を臨む(北西側から)
	⑥積雪時墳丘西側前方部から後円部を臨む(北西側から)
	⑦墳丘東側前方部から後円部を臨む(北東側から)
	⑧積雪時墳丘東側前方部から後円部を臨む(北東側から)

図版3 ①1号トレンチ掘削前前方部から後円部を臨む(北側から)

②1号トレンチ掘削前全景(北側から)

③1号トレンチ掘削前全景(南側から)

④1号トレンチ完掘全景(南側から)

⑤1号トレンチ完掘前方部から後円部を臨む(北側から)

⑥1号トレンチ完掘墳裾部全景(北側から)

⑦1号トレンチ土層断面後円部頂部(東側から)

図版4 ①1号トレンチ土層断面後円部から前方部(南東側から)

②1号トレンチ土層断面前方部の内後円部側(南東側から)

③1号トレンチ土層断面前方部土坑に切られている付近(南東側から)

④1号トレンチ土層断面前方部図版3-③と図版3-⑤の間(南東側から)

⑤1号トレンチ土層断面前方部頂部北端(南側から)

⑥1号トレンチ土層断面前方部頂部北端up(東側から)

⑦1号トレンチ土層断面前方部墳裾(北東側から)

図版5 ①2号トレンチ掘削前(西側から)

②2号トレンチ完掘全景(北側から)

③2号トレンチ完掘全景(南側から)

④2号トレンチ土層断面墳頂側(南東側から)

⑤2号トレンチ土層断面墳裾側(東側から)

⑥3号トレンチ掘削前全景(西側から)

⑦3号トレンチ掘削前全景(東側から)

図版6 ①3号トレンチ完掘全景(東側から)

②3号トレンチ完掘全景(西側から)

③3号トレンチ貯蔵穴全景(東側から)

④3号トレンチ土層断面東端(南側から)

⑤3号トレンチ土層断面後円部傾斜付近(南側から)

⑥3号トレンチ土層断面貯蔵穴西側(西側から)

⑦3号トレンチ土層断面貯蔵穴東側(南東側から)

図版7 ①3号トレンチ土層断面西端(南東側から)

②4号トレンチ掘削前全景(西側から)

③4号トレンチ完掘全景(西側から)

④4号トレンチ完掘全景(北東側から)

⑤4号トレンチ土層断面墳頂側(北側から)

⑥4号トレンチ土層断面中央部(北側から)

⑦4号トレンチ土層断面墳裾側(北側から)

図版8 ①5号トレンチ掘削前全景(西側から)

②5号トレンチ完掘全景(西側から)

③5号トレンチ完掘墳裾部(西側から)

④5号トレンチ土層断面墳頂側(北側から)

⑤5号トレンチ土層断面中央部(北側から)

⑥5号トレンチ土層断面墳裾側(北側から)

⑦4号・5号トレンチ全景(西側から)

図版9 ①7号トレンチ掘削前全景(東側から)

②7号トレンチ完掘全景(東側から)

③7号トレンチ完掘全景(西側から)

④7号トレンチ土層断面墳頂部(南側から)

⑤7号トレンチ土層断面中央部(南側から)

⑥7号トレンチ土層断面墳裾部(南側から)

⑦7号トレンチ作業風景(南東側から)

図版10 ①8号トレンチサブトレンチ完掘全景(東側から)

②8号トレンチサブトレンチ設置前全景(東側から)

- ③ 8号トレンチサブトレンチ設置前全景(西側から)
- ④ 8号トレンチ土層断面墳頂側(北側から)
- ⑤ 8号トレンチ土層断面中央部(北東側から)
- ⑥ 8号トレンチ土層断面墳裾側(北側から)
- ⑦ 9号トレンチ掘削前全景(西側から)
- 図版11 ① 9号トレンチ完掘全景(南側から)
- ② 9号トレンチ完掘全景(西側から)
- ③ 9号トレンチ東壁土層断面(西側から)
- ④ 9号トレンチ北壁土層断面(南側から)
- ⑤ 墳丘西側前方部から後円部を臨む(北西側から)
- ⑥ 10号トレンチ掘削前全景(南側から)
- ⑦ 10号トレンチ北壁土層断面(南側から)
- ⑧ 10号トレンチ南壁土層断面(北側から)
- 図版12 ① 10号トレンチ完掘全景(北西側から)
- ② 盗掘坑掘削前全景(南西側から)
- ③ 盗掘坑表土剥ぎ後全景(南西側から)
- ④ 盗掘坑完掘全景(南側から)
- ⑤ 盗掘坑南北土層断面北側(西側から)
- ⑥ 盗掘坑南北土層断面南側(西側から)
- ⑦ 盗掘坑東西土層断面西側(南側から)
- ⑧ 盗掘坑東西土層断面中央(南側から)
- 図版13 ① 盗掘坑東西土層断面東側(南側から)
- ② 盗掘坑サブトレンチ2完掘全景(南側から)
- ③ 盗掘坑サブトレンチ2南北土層断面(西側から)
- ④ 盗掘坑サブトレンチ2東西土層断面(北側から)
- ⑤ 盗掘坑サブトレンチ3完掘全景(南側から)
- ⑥ 盗掘坑サブトレンチ3南北土層断面(東側から)
- ⑦ 盗掘坑サブトレンチ3東西土層断面(南側から)
- ⑧ 出土遺物

第1章 調査の経過と組織

1. 調査の経緯

津古1号墳は、三国丘陵の先端部に位置しており、北側に東西方向に流れる宝珠川から見晴らしも良いことから、恐らく古くからその存在が知られていた古墳であると考えられる。津古1号墳の存在が一躍多くの人々に知られるようになったきっかけは、昭和43年(1968)に開始されたみくに野団地造成工事である。この際には、津古1号墳の他に、津古2号墳・津古3号墳も発見された。造成工事が行われている最中、福岡教育大学波多野教授による調査団により、津古1号墳の測量調査、津古2号墳・津古3号墳の発掘調査が行われ、結果、津古1号墳は緑地として保存され、みくにの古墳公園として保存された。その後、昭和57年(1982)に小郡考古学研究会により津古1号墳の測量調査が行われたが、確認調査は未実施で、古墳の築造方法・規格・付帯施設の有無・主体部等、不明点が多々残されていた。

平成20年代に入り、市内での相次ぐ大規模発掘調査が一段落し、市内に残る文化財の保存を効果的に行っていく上で、津古1号墳の確認調査を実施する必要性があった。なぜならば、現時点で古墳時代初頭の筑後地域における唯一の首長墓系列として評価される「津古古墳群(津古2号墳、津古生掛古墳、津古1号墳、三国の鼻1号墳)」の内、現存する古墳は津古1号墳のみであり、より良い形での保存管理が求められていたからである。確認調査においては、古墳の文化財的重要性を鑑み、福岡県教育委員会文化財保護課と綿密な連絡を取りながら調査を実施した。なお、測量調査・確認調査・報告書刊行整理作業は、全て平成28・29・30年度の国庫補助事業として実施した。

2. 調査の経過

津古1号墳の確認調査を行なうにあたり、平成28年11月1日～17日に測量調査、平成29年11月6日～平成30年1月30日に確認発掘調査を実施した。調査の主な経過は以下のとおりである。

[平成28年度]

- 11月1日 古墳の周囲に測量の為の杭を設置し、座標移動とレベル移動の実施。
- 11月2日 平板による測量調査開始。
- 11月17日 測量調査終了。

[平成29年度]

- 11月6日 古墳の周囲に杭を設置し、1トレンチ・3トレンチ・5トレンチを設定。
 - 11月7日 3トレンチを設定、調査開始。
 - 11月9日 1トレンチを設定、調査開始。
 - 11月15日 2トレンチを設定、調査開始。
 - 11月16日 5トレンチを設定、調査開始。
 - 11月24日 8トレンチを設定、調査開始。
 - 11月27日 7トレンチを設定、調査開始。
 - 12月1日 9トレンチを設定、調査開始。
 - 12月4日 10トレンチを設定、調査開始。
 - 12月9日 地域の方を対象とした現地説明会を開催。
 - 12月12日 6トレンチを設定、調査開始。
 - 12月14日 古墳測量図追加測量。
 - 1月15日 埋め戻し開始。(～26日)
 - 1月30日 天候不良により、埋戻し後に全景写真撮影。調査完了。
- 以後、図面・遺物整理作業及び報告書作成実施。

3. 調査の方法

津古1号墳を保存している公園内での土地利用による影響か、1982年作成の測量図と比較して一部で土地の改変を確認した。そこで、まず、平成28年度に津古1号墳の測量調査を実施した。測量調査は、1/100で平板測量を行った。その後、平成28年度に作成した測量図を基に、確認トレンチを入れる箇所を福岡県教育委員会と協議を行い、平成29年度に確認調査を実施した。なお、各確認トレンチの図面は平面図・土層断面図ともに1/20で作成し、写真(35mmリバーサル、35mmモノクロ、6×7モノクロ)も各状況で記録を行った。

4. 調査の体制

津古1号墳の調査の体制は、以下のとおりである。

[平成28年度]

小郡市教育委員会

教育長	清武 輝
教育部長	山下 博文
文化財課長	片岡 宏二
係長	柏原 孝俊
技師	西江 幸子 (調査担当)

[平成29年度]

小郡市教育委員会

教育長	清武 輝
教育部長	山下 博文
文化財課長	柏原 孝俊
係長	杉本 岳史
技師	西江 幸子 (調査担当)

[平成30年度]

小郡市教育委員会

教育長	清武 輝
教育部長	黒岩 重彦
文化財課長	柏原 孝俊
係長	杉本 岳史
技師	西江 幸子 (整理担当)



第1図 津古1号墳位置図 (S=1/10,000)

* 『津古永前遺跡』報告書第2図を一部改変

調査・整理作業の実施にあたっては、以下の方々からご指導をいただいた。記して謝意を申し上げます。
(敬称略・順不同、所属は当時)

西谷正 (小郡市文化財専門委員会委員)、重藤輝行 (佐賀大学)、辻田淳一郎 (九州大学)、吉村靖徳、飛野博文、宮地聡一郎、坂元雄紀、坂本真一、城門義廣 (福岡県教育委員会)、岸本圭 (九州国立博物館 (～平成29年度)、福岡県教育委員会 (平成30年度～))、久住猛雄 (福岡市教育委員会)、宮田浩之 (小郡市役所)、九州古墳時代研究会平成29年度見学会ご参加の皆様

第2章 位置と環境

1. 地理的環境

小郡市は、福岡県と佐賀県の県境に位置し、福岡県内では中西部に所在する。東西約6km、南北約12kmの行政区域を有する。小郡市の北側は、福岡県北部に広がる福岡平野と南部に広がる筑紫平野を分断するかのように東側から宝満山系が、西側から脊振山系が張り出す地峡帯が形成されている。この地峡帯を形成する山地の1つである宝満山の山麓に水源がある宝満川が市内中央部を南北方向に流れ、久留米市内で筑後川へ合流する。

小郡市内の地形の特徴は、北側に広がる丘陵から南側に向かって緩やかに下る平坦な台地へと移行し、筑紫平野へと連なる点にある。特に、北側に広がる丘陵は、北東部に独立丘陵である花立山（標高130.6m）、北西部に脊振山系から派生した通称三国丘陵と呼ばれる標高30～40mのなだらかな低丘陵によって構成されている。このうち三国丘陵では、浅い谷が複雑に入り組むことで、南に下るにつれ八手状・舌状に丘陵が延びる複雑な地形を呈しており、古くは旧石器時代から数多くの人々の痕跡が発見されてきている。今回報告する津古1号墳もこうした台地上の丘陵縁辺部に築かれている。一方、谷筋からは古くから湧き水があり、これが市内を流れる小河川の源となり、これら小河川は合流しながら宝満川へと注いでいる。以上のような複雑な地形を呈した三国丘陵は、まさに人々の生活を支える自然の恵みそのものでもあり、現代に生きる私たちに当時の人々の生活を知る手がかりを数多く与えてくれている。

2. 歴史的環境

津古1号墳の歴史的環境について記述するにあたり、まず、津古1号墳についての経緯をまとめた後、小郡市内の歴史的環境について述べることにする。

津古1号墳が全国にその名を知られるようになったきっかけは、昭和43年（1968）のみくに野団地造成時に、津古1号墳（1）・津古2号墳（2）・津古3号墳（3）が発見されたことにはじまる。当時、団地造成工事が行われている最中で、福岡教育大学波多野皖三教授を中心とした調査団により、津古1号墳の測量調査、津古2号墳・津古3号墳の発掘調査が行われた。当初は全て削平される予定であったが、当時の福岡県教育委員会の技師であった渡辺正気氏らの努力により、津古1号墳は緑地として保存された。

その後、昭和57年（1982）、小郡考古学研究会が津古1号墳の測量調査を実施した。成果は、『小郡市史』第4巻に掲載されているので参照願いたい。この時作成された測量図を基に、津古1号墳の現状での大きさについては、「全長42m、後円部径24m、前方部長さ18m、くびれ部幅6.8m、前方部先端幅14m」と推定されてきた。古墳の形状は、前方部が低くて細い古式古墳の特徴を持つ前方後円墳とされ、前方部をほぼ真北に向けていることが特徴として指摘されている。以後、周辺で調査された古墳の成果等を含めて、広く全国に知られ、学史的にも評価を受けてきている。

次に、小郡市内に分布する主要な遺跡を中心に歴史的環境の概要を記すことにする。旧石器時代については、小郡市域において良好な包含層が発見されていないことから未だ不明な点が多いが、花立山山麓や三国丘陵周辺を中心に表採資料や後世の遺構検出の際に混ざって遺物が出土している。中には九州で初めて確認された国府型ナイフ形石器が横隈山遺跡（4：『小郡市史』第4巻）から出土しており、特筆される。

縄文時代になると、市内で唯一早期から晩期にわたってまとまった資料が出土した干潟向畦ヶ浦遺跡（5：市報告119集）、集石炉を検出した大崎井牟田遺跡（6：市報告55集）、石組炉を検出した大保横枕遺跡2（7：市報告260集）等、遺物を伴った遺構が発見されるようになる。また、花立山や三国丘陵といった自然豊かな丘陵近くの大保横枕遺跡2・干潟向畦ヶ浦遺跡・三沢北中尾遺跡（8：市報告169・182・204・209・211・212・216・217・232・233集）・上岩田遺跡（9：市報告200・248・252・261・277集）では、落とし穴が多量に発見されており、当時の狩猟の姿の解明への期待が高まっている。

弥生時代になると、前期に市内で最初に井堰を伴う水田が造られた力武内畑遺跡（10：市報告 190 集）が三国丘陵縁辺部で発見される。その後、三国丘陵の北側に向かって集落が広がることが指摘されており（山崎 2007）、中には、朝鮮系無文土器が多数出土する横隈北田遺跡（11：市報告 48 集）や横隈鍋倉遺跡（12：市報告 26・34 集）、環濠が発見された横隈山遺跡・三沢北中尾遺跡・津古内畑遺跡（13：市報告 1・2 集、県報告 1972・1973・1974）・横隈北田遺跡がある。市中部では、宝満川周辺において大保横枕遺跡 2 で大変珍しい二重環濠を有す集落が発見されている。中期初頭には、ムラからクニへの過渡期にあると考えられる一ノ口遺跡（14：市報告 86 集）が登場し、市域中心部の小郡・大板井遺跡群（15）においては、首長制社会の構造をあてはめられるような母村と分村との関係が想定できる。これは、小郡若山遺跡（16：市報告 93 集）から多鈕細文鏡が出土し、大板井遺跡・寺福童遺跡（17：市報告 221・235 集）で銅戈が出土していることから裏付けされよう。後期になると、前期ほどの集落規模ではないが、小郡・大板井遺跡や三国丘陵を中心に集落が築かれている。

古墳時代になると、三国丘陵では前期・後期を中心に古墳が築造されている。前期には、筑後地域唯一の首長墓系列である「津古古墳群」が「津古 2 号墳→津古生掛古墳（18：市報告 44 集）→津古 1 号墳→三国の鼻 1 号墳（19：市報告 25 集）」の順に築かれた。これらの各古墳からは、畿内の影響を色濃く受けた遺物が出土していることから、古墳時代初頭の早い時期から畿内の文化を受け入れていると考えられている。一方で、古墳以外の墓制として、弥生時代以来の墓制（石棺墓群、甕棺墓群等）を受け継いでおり、横隈井の浦遺跡（甕棺墓群）（20：市報告 66 集）、横隈山遺跡第七地点（方形周溝墓）、三沢畝道町遺跡（方形周溝墓）（21：市報告 72 集）、横隈上内畑遺跡（方形周溝墓）で発見されている。畿内系の出土遺物があることから、他地域からの文化流入に関して寛容であり、これらに埋葬された人々は、津古古墳群に埋葬された首長を助けた地域の有力な人とも考えられている。後期には、三国丘陵の広い範囲で古墳 75 基、横穴墓 38 基が築造され、「三沢古墳群」（22：市報告 62・79 集）と総称されている。これらの古墳群は、5 世紀後半頃に築造が開始され、6 世紀末から 7 世紀前半に築造の最盛期を迎え、その後、石室の縮小化や副葬品の貧弱化がすすみ、8 世紀前半に終焉を迎える。一方、ムラの性格を持つ遺跡は、弥生時代と比較すると少ないものの、中期に須恵器の窯跡が発見された荊又遺跡群（23：市報告 80・83・88・94 集）や三国の鼻遺跡や津古生掛遺跡などにおいて数軒住居跡が確認されている。6 世紀後半段階になると、三国丘陵を中心に津古土取遺跡（24：市報告 59 集）、横隈北田遺跡、横隈鍋倉遺跡、横隈狐塚遺跡（25：市報告 17・27・29・46・70・116・250 集）、津古中剪遺跡（26：市報告 33 集）、横隈井の浦遺跡等で集落が営まれている。

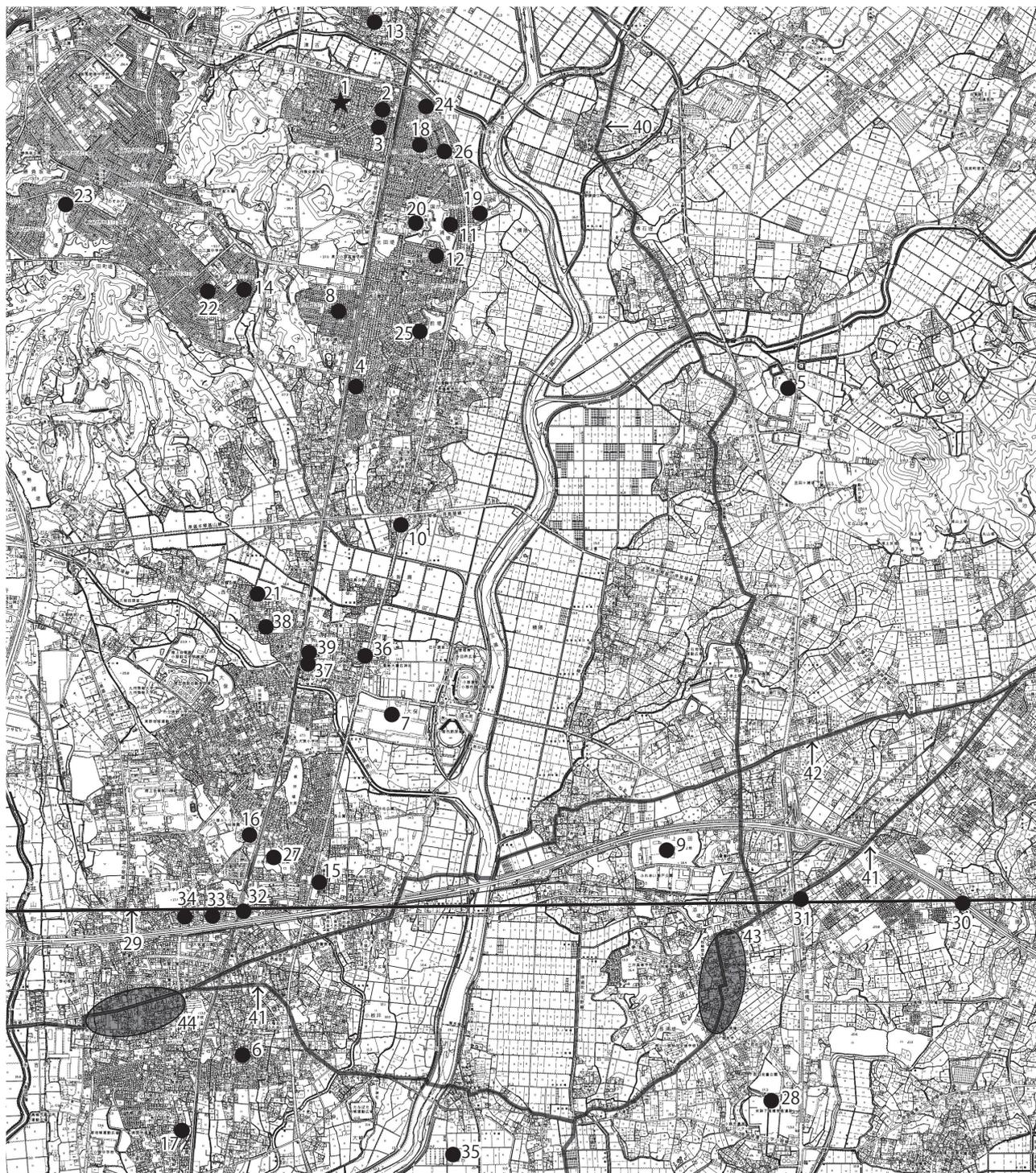
古代になると、現在の小郡市内は筑後国御原郡と筑後国御井郡の 2 郡で構成されていたが、そのうち御原郡の官衙が、7 世紀後半に上岩田遺跡で評衙が造営された後、8 世紀前半に小郡官衙（27：県報告 1971、市報告 6・47・56・128・167・224・255・300 集）へと官衙の機能が移り、その後下高橋官衙（28：県報告 129・133 集）へと変遷していく。そうした中、道路も整備されており、筑紫平野東西官道（29）の痕跡が、東から宮巡遺跡（30：県横断 26 集）、松崎六本松遺跡 1・2（31：市報告 188・246 集）、向築地遺跡（32：市報告 5 集）、小郡前伏遺跡（33：市報告 288 集）、小郡大保道遺跡（34：市報告 108 集）で確認されている。平成 30 年には下高橋官衙から筑紫平野東西官道へと延びる官道が松崎六本松遺跡 3（平成 31 年度報告）で発見されており、今後ますますの調査の進展が期待されている。

中世になると、小郡市域で拠点集落が形成されるようになる。宝満川を利用した港町である稲吉元矢次遺跡（35：市報告 87 集）や、市域を南北に走り、式内社である御勢大霊石神社の側を通る旧筑前街道沿いを中心に大保龍頭遺跡（36：市報告 135・140・183・187 集）・大保横枕遺跡 2・大保西小路遺跡（37：市報告 99・257・305・301・307 集）・三沢寺小路遺跡（38：市報告 117・158・222・229・263 集）、三沢権道遺跡（39：市報告 82・125・320 集）が発見されている。また、1359 年の大保原合戦の戦死者を葬った善風寺跡地と考えられる痕跡が三沢寺小路遺跡を中心に発見されており、今後ますますの調査成果の蓄積が求められている。

江戸時代になると、寛文 8 年（1668）に有馬豊範が久留米藩より分封され松崎藩 1 万石が成立したのに伴い、久留米藩府中宿から福岡藩山家宿をつなぐ薩摩街道（40）が整備された。その他にも、肥前から小郡町、松崎町を經由して筑前へ抜ける秋月街道（41）（彦山道（42））等様々な街道が交差し

ており、宿場町である松崎宿（43）や街道の交差点に位置する小郡町（44）は、人々が交差する地として大きく発展していった。

戦後は、道路網の整備や宅地開発等が相次いで行われ、現在の小郡市の形へと発展を遂げていっている。



- 1：津古1号墳 2：津古2号墳 3：津古3号墳 4：横隈山遺跡 5：干潟向畦ヶ浦遺跡 6：大崎井牟田遺跡
 7：大保横枕遺跡 8：三沢北中尾遺跡 9：上岩田遺跡 10：力武内畑遺跡 11：横隈北田遺跡
 12：横隈鍋倉遺跡 13：津古内畑遺跡 14：一ノ口遺跡 15：小郡・大板井遺跡群 16：小郡若山遺跡
 17：寺福童遺跡 18：津古生掛古墳 19：三国の鼻1号墳 20：横隈井の浦遺跡 21：三沢畝道町遺跡
 22：三沢古墳群 23：菟又遺跡群 24：津古土取遺跡 25：横隈狐塚遺跡 26：津古中剪遺跡 27：小郡官衙
 28：下高橋官衙 29：筑紫平野東西官道 30：宮巡遺跡 31：松崎六本松遺跡1・2 32：向築地遺跡
 33：小郡前伏遺跡 34：小郡大保遺跡 35：稻吉元矢次遺跡 36：大保龍頭遺跡 37：大保西小路遺跡
 38：三沢寺小路遺跡 39：三沢権道遺跡 40：薩摩街道 41：秋月街道 42：彦山道 43：松崎宿 44：小郡町

第2図 津古1号墳周辺遺跡分布図（S = 1/50,000）

第3章 津古1号墳測量調査

これまでの津古1号墳の測量図としては、みくに野団地造成時に作成された測量図、昭和57年(1982)に小郡考古学研究会が作成した測量図がある。なお、これらの測量図の内、みくに野団地造成時に作成された測量図を未だ発見するには至っておらず、今後も搜索したいと考えている。一方、小郡考古学研究会が作成したものは、精度も高く、また、津古1号墳を評価する根拠資料としてこれまで様々な文献において引用されている。よって、当初はこの測量図を基に確認調査のためのトレンチ設定を行う計画であった。しかし、測量図が作成されてから30年以上が経過しており、また、近年の集中豪雨等による影響のためか、後円部墳頂において土砂の流出が目立ってきていた。したがって、確認調査のトレンチ設定を行う前に、まず、小郡考古学研究会作成の測量図と現状の古墳の状況とを比較する作業を行うことで、新たに古墳の測量図作成が必要かどうかについて判断することとした。

小郡考古学研究会作成の測量図と現状の古墳の状況とで変化が見られた箇所は、以下の5箇所である。

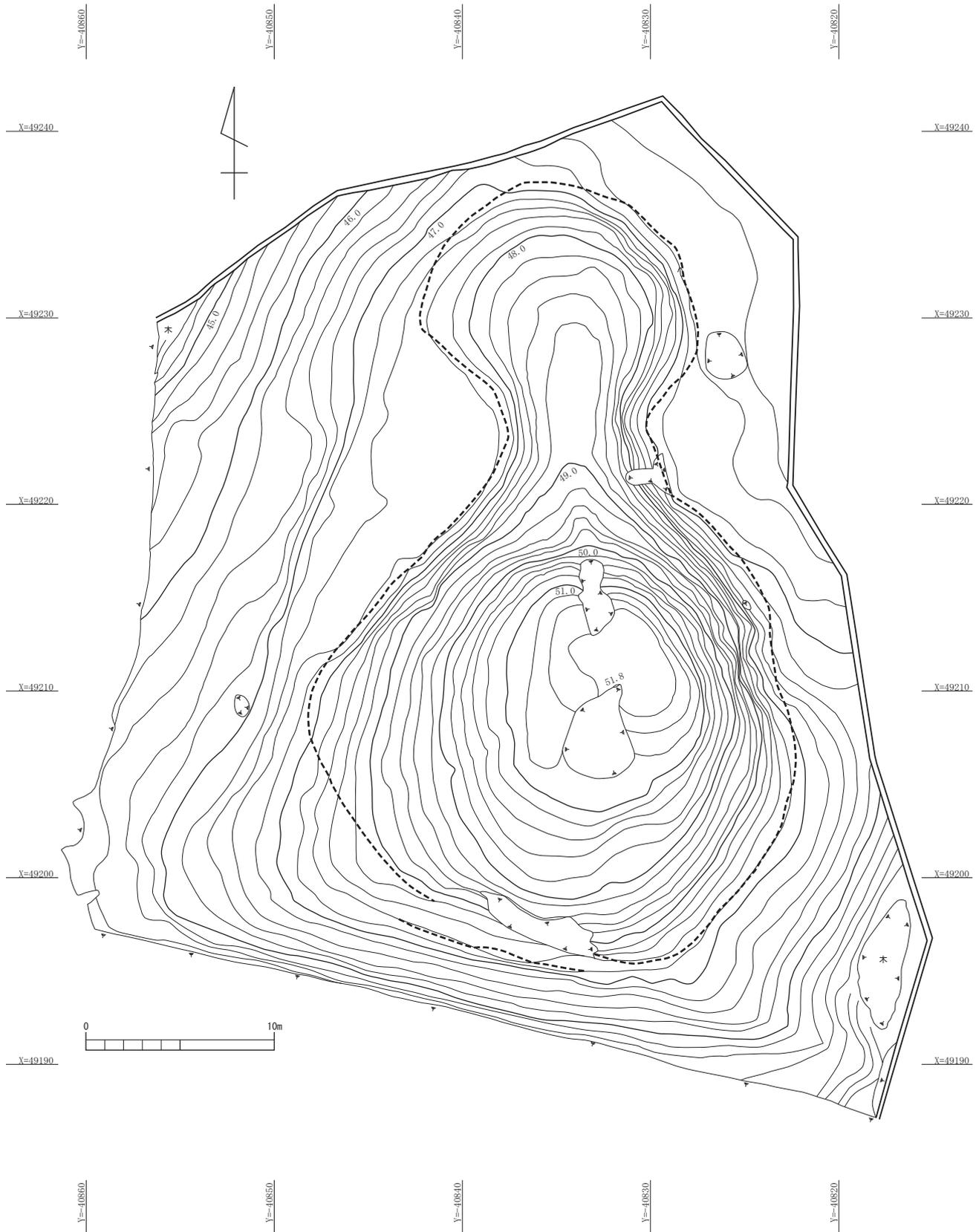
- 1) 後円部頂部から前方部側に向かう斜面上において、土砂の流出が見られる。
- 2) 後円部南側において、土砂の流出が見られる。
- 3) 後円部東側において、土砂の流出による削平が進んでいる状況が見られる。
- 4) 前方部西側の平坦部(標高47.400～47.600m)において、土地の削平の可能性が想定できた。
- 5) 古墳周辺に残る平坦部において、所々掘り込みが見られる。

古墳測量図作成にあたっては、近隣に所在する多角点よりレベル移動を行い、津古1号墳を保存するみくに野団地古墳公園の敷地境の点と与点として座標移動を行った。測量図作成方法は、第1章3調査の方法で記したとおりで、作成した古墳測量図は第3図である。

上記で土砂の流出や削平が想定できた各箇所について等高線の状況から現状を評価すると下記のとおりの所見となる。

- 1) 後円部頂部から前方部側に向かう斜面上における土砂の流出は、後円部頂部から墳丘を削るように前方部へと流れ込んでいる。近年、小郡市内では梅雨時期における豪雨が毎年のように確認されており、その影響で土砂が流出した箇所が水の流れる道となり、年々墳丘を削り続けているものと考えられる。
- 2) 後円部南側における土砂の流出は、芝生が生えていない箇所を中心に広がっており、墳丘表面の土を少しずつ押し流し、墳丘の地山面がむぎだしになっている状況であった。1)と同様に近年の豪雨による影響が考えられる。
- 3) 後円部東側における土砂の流出は、等高線が西側により入り込んだ形でのカーブを確認していることから、削平が進んでいるものと考えられる。
- 4) 前方部西側の平坦部における削平は、47.000～47.400mの等高線が以前は古墳の形状に沿ってカーブしていたのに対し、直線的な形状に変化していることから、古墳側における平坦面の平地利用が考えられよう。
- 5) 古墳周辺に残る平坦部における掘り込みについては、測量図では評価ができないため、一部を確認調査時のトレンチで確認することが必要である。

これらの状況を踏まえ、平成29年度に確認調査を実施するトレンチを設定した。



第3図 津古1号墳測量図 (S=1/300)

*破線は、地形変換点を確認した地点を示す

第4章 津古1号墳確認調査

1. 各トレンチの発掘調査

全体で1～10までの10か所のトレンチを設定した。1・2・3・8トレンチが概ね長軸・短軸の直交方向で設定したものである。調査は、1m幅で表土剥ぎを行い、追加の確認が必要なトレンチについては、その中を20cm幅で掘削を行った。以下、各トレンチの調査成果とトレンチ周辺の地形について述べる。

1 トレンチ（第5図、図版3・4）

1 トレンチは、事前に実施した詳細墳丘測量の結果から得られた推定墳丘主軸に沿って、後円部墳頂から前方部方向に長さ26.5m、幅1mで設定し、墳丘規模、築造方法、周溝の有無を確認することを目的とした。現地表面で標高46.6～51.6mのところに位置する。

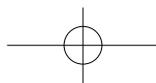
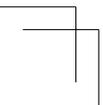
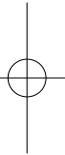
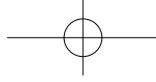
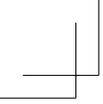
現況として、墳丘上に芝生が植えられており、この芝生からなる表土直下が墳丘である。しかし、後円部墳頂から北側斜面の範囲では、雨水等の影響により土砂の流出が著しく、墳丘表面より深さ約20cm程度の水の走り道による窪みが生じており、この付近を中心に三国丘陵で一般的に確認できる橙色土の地山がむき出しとなっていた。また、後円部と前方部の境付近には後円部頂部から前方部に向かって流出した土砂が墳丘上に堆積していた。

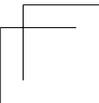
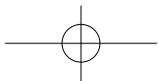
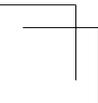
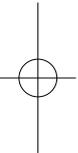
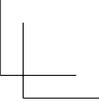
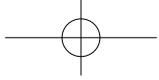
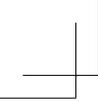
トレンチ調査は表土の除去を中心とし、トレンチ西側に幅約20cmのサブトレンチを掘削し、より詳細な観察が必要だった前方部墳端付近は幅約45cmのサブトレンチに拡張し、墳丘の構築方法を土層観察から明らかにした。まず、後円部墳頂部から後円部墳裾までは、表土除去以前から土砂の流出により周辺の三国丘陵と同じ地山を確認していたが、確認のため幅約20cmでサブトレンチを約10cmの深さで掘削を行った。結果、頂部を中心に地山であること、後円部裾付近に向かって地山が流れ出した土が堆積していることを確認することができた。後円部墳裾はサブトレンチ南端から692cmの位置で標高は49.2mを測る。後円部墳裾付近では前方部に向かって50cm程度の平坦面を確認した後、旧表土である17層直下より18～20層の堆積土を確認した。これらは旧表土より下位に堆積していることから古墳築造以前の掘り込みと評価できよう。17層の旧表土は16・22層の掘り込みで一部途切れるものの35層へと続き、前方部墳裾側では39・40層に切られるが、41層の旧表土へと続く。これらの旧表土の上位に堆積している土層についての評価は、20～33層にかけては、にぶい橙色系～にぶい黄橙色系の土が堆積しており、こぶし大の石も多数出土した地点もあった。土色から当初は地山と判断してしまったが、サブトレンチを設定し掘削することで35層の旧表土に至ったこと、また、他のトレンチを掘削している際、旧表土や確実な地山と判断する層の上位の堆積層において、20～33層と同様な土質の層を確認したことから、20～33層は地山ではないと判断した。35層から41層へと旧表土の標高は下るが、これは丘陵が南側に向かって下っていることから判断するに、その影響によるものと評価できよう。41層の上位に堆積する37・38層は、ともに広く堆積している状況で塊上の境を見出すことはできなかった。41層の旧表土は46層で切られ、その直下で地山に至り、その北側に堆積する2～4層は堆積層であることから46層と2～4層の間で地山がやや垂直気味の傾斜を呈することからこの部分が墳端と判断できる。傾斜が垂直気味であることから、『小郡市史』に記載されているフェンス設置の際に削られた箇所と評価でき、本来はもう少し北側へと墳裾は広がっていたものと考えられる。墳裾から北側にむかっては周溝と評価できるような掘り込みを確認できなかったことから、周溝は無いものと考えられるが、トレンチを設定できる長さが短かったため断定はできない。

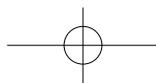
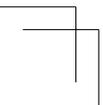
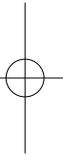
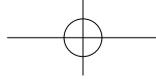
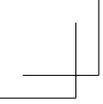
なお、出土遺物はなかった。

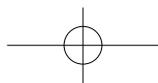
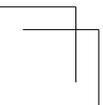
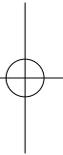
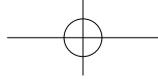
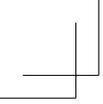
2 トレンチ（第6図、図版5）

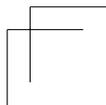
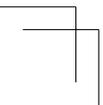
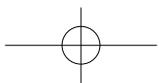
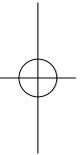
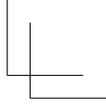
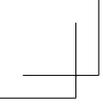
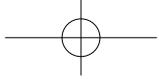
2 トレンチは、事前に実施した詳細墳丘測量の結果から得られた推定墳丘主軸に沿って設定する予

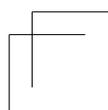
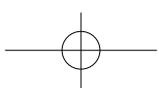
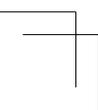
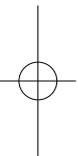
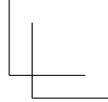
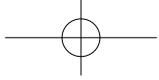
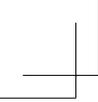








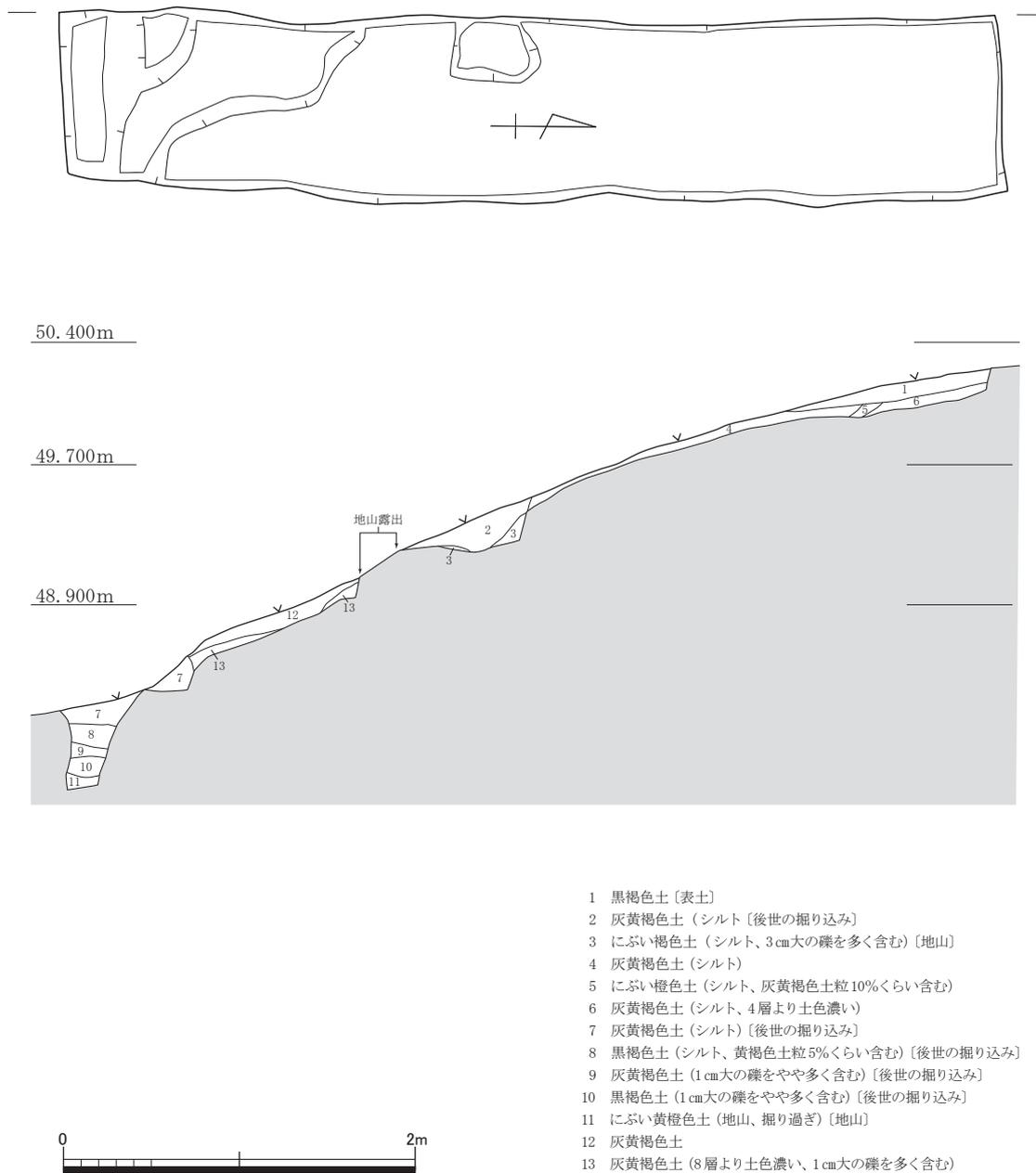




定であったが、墳裾側の削平部分が大きかったことからやや東よりに後円部墳頂から墳裾に長さ5.3m、幅1mで設定し、墳丘規模、築造方法、周溝の有無を確認することを目的とした。現地表面で標高48.2～50.2mのところに位置する。周辺は、古墳の南側の形状をギリギリ残す形で公園として保存されているため、トレンチの南端から1mも満たない地点で斜面となる。また、後円部南西側の墳丘土砂の流出が大きく、古墳の形状が削平されている状況が現地表面からも確認できる状況である。

トレンチ調査は表土の除去を中心とし、墳丘の築造方法を土層観察から明らかにした。現況として、墳丘上に芝生が植えられており、この芝生からなる表土直下が墳丘である。表土を剥いだところ、深さ10cmにも満たないところで地山である橙色土を確認した。2層の掘り込みは、一見墳丘における段築の可能性を想定したが、墳丘に沿って堆積している4・5・6層の上位から掘り込まれていることから、この窪みを段築として積極的に評価することは難しいと判断した。また、7～13層に相当する掘り込みの内7～11層の掘り込みは、墳裾から平坦部分へと変化する変化点に位置し、2トレンチのさらに南側にも広がっていたことから、周溝の可能性を一時は想定した。しかし、墳裾部に堆積した7層と8～11層の掘り込みの最上層に堆積する7層とは、土質が同質であった。このことから、本来は7層

2Tr



第6図 津古1号墳2トレンチ平面図・断面図（S=1/40）

が墳丘を覆うように堆積していたが、宅地造成の中で古墳を保存する際、あるいは、公園として整備する際に削られ、現在のような土層になったと想定するほうが妥当と考えられた。よって、7～11層の掘り込みは周溝ではないと判断した。また、第6図の土層図で示しているとおり、2層と12層の間では既に芝生部分が剥がれていたため表土が無く、橙色土の地山が露出していた。また、7層の堆積状況と地山露出部分との土層関係から、12・13層は後世の掘り込みで墳丘が削られたと評価できよう。以上から、2トレンチ付近の築造方法は、基本的に地山削り出しによって後円部が整形されたと言えよう。

なお、出土遺物はなかった。

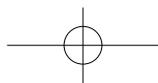
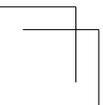
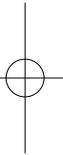
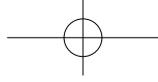
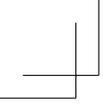
3 トレンチ（第7図、図版5・6・7・13）

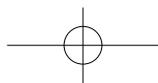
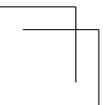
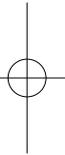
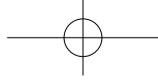
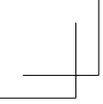
3 トレンチは、事前に実施した詳細墳丘測量の結果から得られた推定墳丘主軸に対して後円部において直角に交わる位置に墳頂から墳裾に長さ13.7m、幅1mで設定し、墳丘規模、築造方法、周溝の有無を確認することを目的とした。現地表面で標高47.0～50.3mのところを位置する。現地表面では、墳端が48.0m前後のところを推定でき、その後なだらかに東側に向かって下っていている。

トレンチ調査では、表土の除去を中心とし、墳丘の築造方法や墳丘規模を土層観察から明らかにしようと試みた。現況として、墳丘上に芝生が植えられており、この芝生からなる表土直下が墳丘である。表土を剥いだところ、墳頂から墳裾にかけて深さ10cmにも満たないところにおいて黄橙色土の2層・ぶい橙色土の4層を確認した。これらの層は、一見地山の土にも類似する土質を呈していたが、1～3cm代の礫を含む等地山と断定するには混ざりの多い土質であった。よって、北側に幅30cmのサブトレンチを墳頂から墳裾にかけて設定し、確実に地山を検出できる深さまで掘り下げを行った。結果、墳頂側において37層で旧表土を検出し、その直上には10～36層と墳裾側から墳頂部に向かって少しずつ塊上に堆積している状況を確認した。これらの塊上の堆積層を細かく観察していくと、34～36層のぶい橙色系の土、その上に30～33層のぶい褐色土～黒褐色系の土、その上に20～23層のぶい灰黄褐色系の土、その上に13～15・17・18層のぶい橙色系の土、その上に10・11層の灰黄褐色系の土が堆積していた。これらは、各近い土質ごとに墳裾から墳頂部に向かってなるべく同じ高さになるように意識して堆積していることから、盛土の可能性が想定できよう。また、37層は墳丘の途中で8層に削られており、8・9層は橙色の地山に非常に類似した土質を呈していることを踏まえると、後世に堆積した土、あるいは、墳頂部より流出した土が堆積した可能性が考えられよう。39・40層でもぶい橙色系の土を確認していることから、8・9層と同様のことが考えられよう。

一方で、墳裾側においては、41～57・63・64層にかけて東西幅約3.2m、深さ約1mの掘り込みを確認した。これらは、墳頂側の59層の堆積層と墳裾側の62層の地山を切るように掘り込まれており、東側の遺構の壁面が垂直気味に床面に向かって伸びていた。また、弥生時代の土器片が1点出土したことを踏まえると、弥生時代に三国丘陵で数多く掘削された貯蔵穴と考えられよう。次に、38～40層と59・60層に関する評価である。59・60層の直上で旧表土が確認されておらず、弥生時代の貯蔵穴である44層が59層を切ることから、少なくとも59層は41～57・63・64層からなる弥生時代の貯蔵穴が掘削される以前に堆積していたと評価できる。また、40層は、59層だけでなく貯蔵穴の最上層に堆積する44層の直上にも広がっていることから、弥生時代の貯蔵穴に埋土が堆積した後に堆積したと評価できる。38～40層はいずれもぶい橙色土を呈しており、墳頂側に地山に近い土が8・9層のように現地表面近くに堆積していたことを踏まえると、何らかの理由で堆積層が削られたのち、墳頂側の土砂が流れ出したと想定することもでき、墳丘の盛土と評価するには根拠が足りない。また、59・60層の堆積層と61層の地山の境で傾斜が変化することから墳端の可能性も層的である。最後に、貯蔵穴より西側部分は表土を約6cm剥いだ時点で62層の地山に至った。

以上から、墳頂側は盛土の可能性が、墳裾側は土砂の流出の点を評価するならば地山削り出しで築造していると考えられる。墳裾は、傾斜の変化点を評価すると60層が堆積を始める標高48.2m付近と考えられよう。なお、周溝については、想定できる地点に弥生時代の貯蔵穴が検出できたことから、有無についての評価には至らなかった。





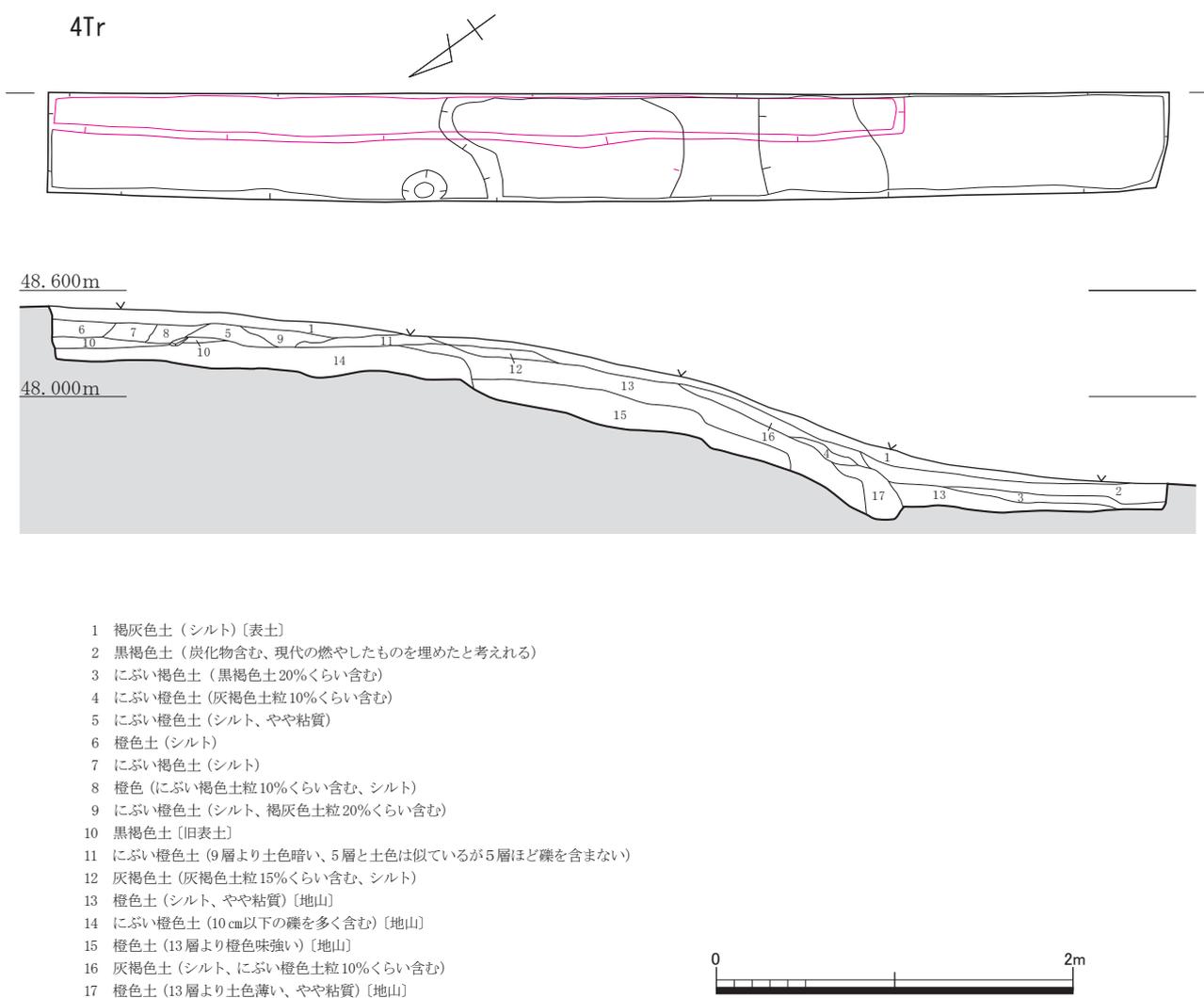
出土遺物は、弥生時代の貯蔵穴から出土した弥生土器の小片1点（図版13）のみである。

4 トレンチ（第8図、図版7・8）

4 トレンチは、事前に実施した詳細墳丘測量図を基に前方部西側のやや撥型に広がりをはじめると想定した地点に対して直角に交わる地点に前方部墳頂付近から墳裾に長さ6.3m、幅1mで設定し、前方部の形状、墳丘規模、築造方法を確認することを目的とした。現地表面で標高47.6～48.4mのところに位置する。周辺は、公園利用の為か、現況での古墳の墳裾から西側にかけて大きく広がる平坦面を確認することができる状況である。

トレンチ調査は表土の除去を中心とし、墳丘の築造方法と墳丘規模について土層観察から明らかにしようと試みた。現況として、墳丘上に芝生が植えられており、この芝生からなる表土直下が墳丘である。表土を剥いだところ、墳頂側の現地表面より深さ32cmで旧表土と評価できる黒褐色層である10層を確認し、直下14層のにぶい橙色土の地山の層を確認した。旧表土の直上に堆積する6～8層は一見すると盛土とも見受けられるが、旧表土を削平するように5層・9層が堆積し、かつ、8層は5層を切るように堆積していることから、6～8層は盛土ではなく後世の堆積層と評価できよう。また、墳裾の2・3層からは現代のゴミやゴミを燃やした際にでたと考えられる炭が出土していることから、2層が墳丘に沿って一見周溝部のような掘り込みを見せるが、これらは後世の削平の痕跡と評価できよう。

上記のように削平を受けている箇所が多く、現在見えている地山の確証を得るには困難な状況であっ



第8図 津古1号墳4 トレンチ平面図・断面図（S=1/40）

たことから、東側に幅 40cm のサブトレンチを墳裾部まで設定し、明確に地山と確認できるところまであえて掘削を行った。結果、墳頂側では、当初地山と捉え掘削を止めた 14 層がさらに広がり、墳丘中央部では地山の 13 層の下にさらにより橙色味の強い 15 層が広がり、墳裾側では地山と捉えた 17 層がさらに広がっていることを確認できた。このことから、4 トレンチは、墳頂側で旧表土が削られ、墳裾側で後世の削平により削られていることから、現状としては墳丘の規模について言及できる状態ではないと判断した。また、墳丘の築造方法については、墳頂側で旧表土が一部で検出されているが、墳裾側では地山しか確認できないことから、墳頂は盛土、墳裾に向かって地山削り出しの可能性が想定できるが、高低差が低く、後世の削平の影響を受けた部分が多いことから判然とはしない。

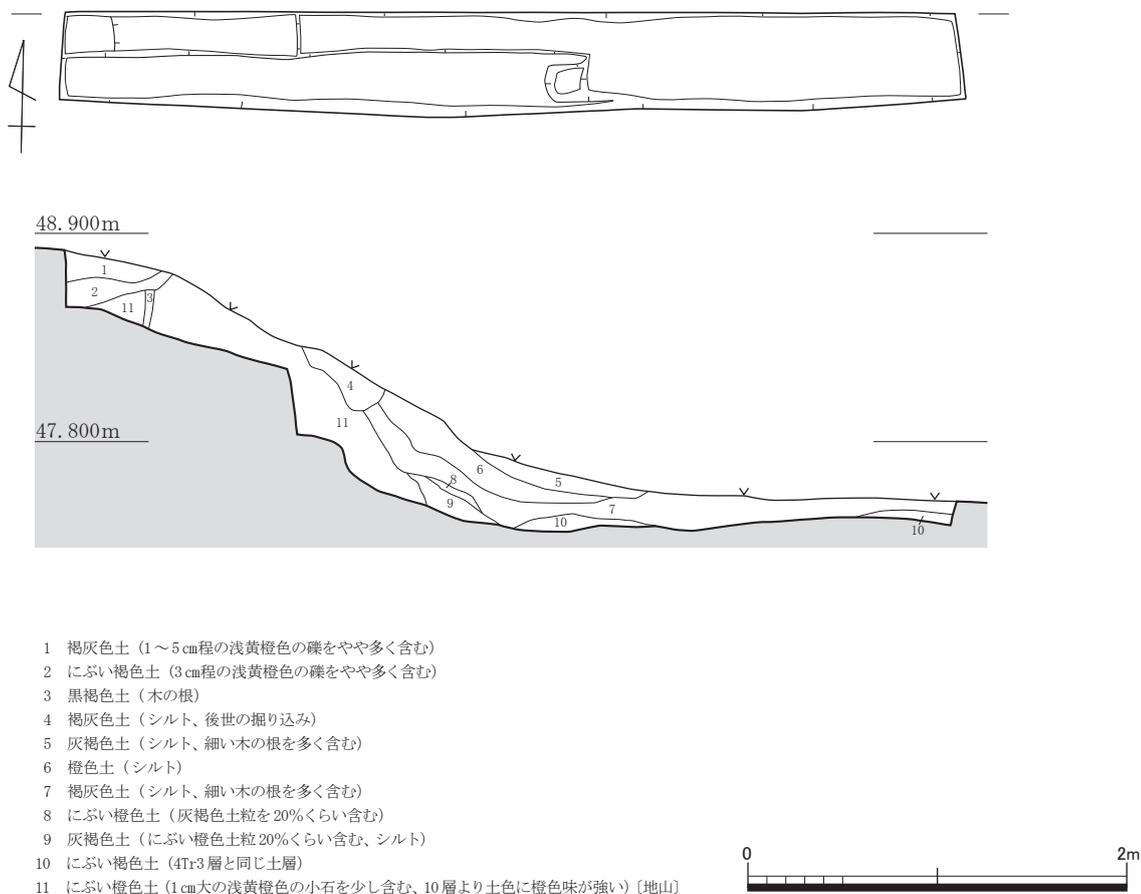
なお、出土遺物はなかった。

5 トレンチ (第 9 図、図版 8)

5 トレンチは、事前実施した詳細墳丘測量の結果から得られた推定墳丘主軸に対し、前方部において直角に交わり、かつ現況として推定墳丘主軸方向に対して併行に延びる墳頂から墳裾に長さ 5 m、幅 1 m で設定し、墳丘規模、築造方法、周溝の有無を確認することを目的とした。現地表面で標高 47.5 ~ 48.8 m のところに位置する。周辺は、公園利用の為か、現況での古墳の墳裾から西側に大きく広がる平坦面を確認することができる。

トレンチ調査は表土の除去を中心とし、墳丘の築造方法と墳丘規模について土層観察から明らかにしようと試みた。現況として、5 トレンチのすぐ西隣には巨木が植えられており、この影響によるのか墳頂側の墳丘を中心に 11 層のにぶい橙色土の地山が既にむき出しになっている箇所が見受けられた。その他の部分では、墳頂側の 1・2 層が地山を掘り込むように堆積しており、かつ、1 トレンチの墳頂

5Tr



第 9 図 津古 1 号墳 5 トレンチ 平面図・断面図 (S=1/40)

側の20～33層と同様に1～5cm程度の浅黄橙色系の礫を多く含んでいた。地山を墳頂中心部に向かって掘り込んでいることから後世の削平による堆積と評価できよう。墳裾側の4～10層は墳丘に沿って流れるように堆積しており、かつ、7層において現代のゴミ（公園を囲むフェンスの切れ端等）を検出していることから、4～6層は現代のゴミが堆積した後に堆積した層と考えられる。なお墳裾側の7・9・10層部分の直下は地山を検出できるところで掘削を止めている。このことを踏まえると8～10層は盛土ではなく堆積土の可能性が高いと考えられよう。以上から、前方部の墳頂部が後世の掘り込みで削られているため前方部の墳頂端を評価することはできず、また、7層の堆積層が墳裾から墳丘に沿って広範囲に確認できることから墳端を評価することもできない状況である。しかし、墳裾平坦部では周溝となるような掘り込みを確認することができなかったことから、この付近での周溝はないと考えられるが、トレンチを設定できる長さが短かったため断定はできない。また、墳丘中央部で地山である11層を確認していることから、構築方法としては墳丘中央部より墳裾に向かって地山削り出しの可能性が想定できるが、高低差が低く、後世の削平の影響を受けた部分が多いことから判然とはしない。

なお、出土遺物はなかった。

6 トレンチ（盗掘坑）（第10図、図版12・13）

6 トレンチは、後円部頂部の盗掘坑の性格を把握することを目的とし、直径4.5m前後の楕円形の範囲で設定した。現地表面で標高51.1～51.8mのところろに位置する。周辺は、墳頂部中央部に向かって緩やかに盗掘坑部分が窪んでいる状況である。

トレンチ調査は、まず、盗掘坑として窪んでいる部分の表土の除去を行った。現況として、墳丘上に芝生が植えられており、この芝生からなる表土直下が墳丘である。トレンチ内の表土を剥いだところ、トレンチ内に黒い土が広がっている範囲があることがわかった。この黒い土が堆積している地点の性格付けを行うために、やや幅広くサブトレンチを東西幅約90cm、南北幅2.4mで設定し、黒い土部分の除去を行った。結果、黒い土部分を除去した下位は、南西部を中心に地山が検出できたものの中央部に向かって傾斜しながら別の堆積層が存在しており、盗掘坑部分全体においてより詳細な土層観察が必要であることがわかった。よって、当初設定したサブトレンチに東西方向と南北方向にそれぞれ幅約25cmのサブトレンチを設定し、地山を検出する面まで掘削を行った。結果、南北方向の土層部分（D-D'）では、深さ約30cmのところろで地山を検出し、その直上の8・9層で粘質がやや強い層を確認した。その上の5層で木炭が固く敷き詰められた層があり、その上の1～4層は、現代のゴミが多数出土した。このことから、盗掘坑の上端は、現代による削平を受け大きく窪んでおり、地山直上の粘質土が粘土礫の可能性も秘めるが、判然としないところであった。しかし、現代のゴミを含む攪乱の層を剥ぐと、地山の傾斜などから一段落ちになる窪みを北西側から南東方向に向かって確認した。

そこで、次の調査方針として、仮にこの掘り込みが主体部の掘り込みの端部であった場合と仮定し、サブトレンチ1・2・3を設定した。また、併せて、現代のゴミの層を含む盗掘坑時代の性格を明らかにするためにも、窪み全体に対する土層の体積状況を把握することが必要であったことから、最初に掘削したトレンチに対して東西方向にサブトレンチを設定し、拡張することで、土層堆積の状況を確認した。

まず、窪み全体に対して土層状況を把握するために拡張したサブトレンチについて記す。東西方向・南北方向それぞれにおいてサブトレンチを設定したが、地山直上で粘質系の層を確認し、その上側では現代のゴミを含む層が確認できた。よって、最初に掘削したトレンチで確認した土層堆積状況と同様の状況であり、窪みは中央部を大きく現代の掘削により削平されていることがわかった。

次に、主体部を想定して設定したサブトレンチ1・2・3の状況についてである。サブトレンチ1は、窪み北端で設定した。掘削を行ったところ南北方向（F-F' 土層）において、6層で縦方向の灰褐色土の体積を確認した。また、7層において地山を確認し、4・5層で灰褐色土～黒褐色土系の粘質系の土を確認していることから、粘土礫の可能性が想定された。しかし、東西方向（E-E' 土層）では、5層でのみ黒褐色系の粘質系の土を確認していることから、このトレンチの大部分も削平されている可

能性が考えられる。しかし、地山の広がりから少なくとも掘り込みのコーナー部分を確認していることから、南北土層の6層を評価するならば、主体部の北西側の輪郭を検出した可能性も想定されよう。この掘り込みの評価を行うために、サブトレンチ2・3を設定した。

サブトレンチ2は、サブトレンチ1に対してシンメトリーになる位置に設定を行った。サブトレンチ1で検出した掘り込みが続くと想定したが、結果としては掘り込みのコーナー等は検出できず、下端においてやや丸味の強い状況を確認した点にとどまる状況であった。

最終的な確認として、サブトレンチ3をサブトレンチ2と同じ軸で延ばした地点で設定を行った。結果、地山直上で粘質系の土の体積を確認するも、それより上側は現代の削平により削られている状況であった。

以上より、盗掘坑は全体的に現代の削平により大きく削られていることがわかった。サブトレンチ1を中心に意図をもって掘削されたと思われる掘り込みを確認したが、この掘り込みも途中で現代の削平の影響を受けているため、想定線を引くのが非常に難しい状況であるといえる。

なお、出土遺物は、サブトレンチ1で昭和28年の10円玉を含む現代のゴミのみ出土している。

7トレンチ（第11図、図版9）

7トレンチは、2・3トレンチで周溝の有無について確証が不十分であったことから、さらに後円部の築造方法や周溝の有無について確証を得るために、後円部東側において墳丘の残りが良く、かつ、周溝の有無の評価ができる箇所に後円部墳頂から墳裾にかけて長さ8.7m、幅1mで設定し、墳丘規模、築造方法、周溝の有無を確認することを目的とした。現地表面で標高47.2～50.0mのところに位置する。現地表面では、墳端が48.2m前後のところに推定でき、その後なだらかに東側に向かって下っている。

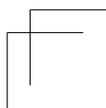
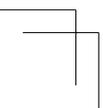
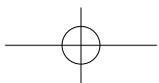
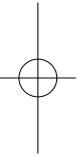
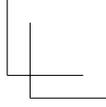
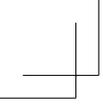
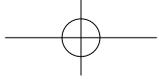
トレンチ調査では表土の除去を中心とし、墳丘の築造方法や墳丘規模を土層観察から明らかにしようと試みた。現況として、墳丘上に芝生が植えられており、この芝生からなる表土直下が墳丘である。表土を剥いだところ深さ20cm前後で灰褐色土の3層が広範囲に広がり、所々で橙色土の7層の地山が見受けられた。このことから、3層は墳丘に後世に堆積した層と捉えられよう。6層は礫層であり、これより東側では2cm代の礫を少し含むにぶい橙色土を呈する5層が広がっている。この土は1トレンチの前方部墳頂で確認した20～33層と類似している。なお、墳裾側の3～6層の直下では地山である7層が広がっていた。以上から、墳頂から墳裾にかけて深さ6～10cmで地山に至ることから地山削り出しにより後円部が形成されたと想定できる。墳端は、なだらかに地山が続くことから判別が難しかったが、傾斜の変化点を評価すると墳丘中央部の7層の西側検出点で傾斜角度が変化しており、この部分がちょうど現地表面でも地形変化点と確認した標高48.2m付近に一致することから、この部分が墳端の可能性が高いと考えられる。また、墳裾より東側においては周溝と評価できる掘り込みを確認できなかったことから、この付近では周溝は無いと考えられるが、トレンチを設定できる長さが短かったため断定はできない。

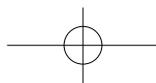
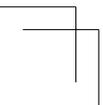
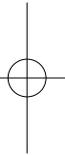
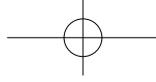
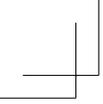
なお、出土遺物はなかった。

8トレンチ（第12図、図版10）

8トレンチは、事前に実施した詳細墳丘測量の結果から得られた推定主軸に対し前方部において直角に交わり、かつ少しでも前方部の形状が残存すると評価できる地点に墳頂から墳裾に長さ7.3m、幅1mで設定し、墳丘規模、築造方法、周溝の有無を確認することを目的とした。現地表面で標高46.4～48.4mのところに位置する。周辺は、東側の平坦面において窪みを確認しており、この窪みの性格を判別するために、わざと、この窪みにかかるようにトレンチを東側へ延ばした。現地表面では、墳端が46.6m前後のところに推定できる。

トレンチ調査は表土の除去を中心とし、墳丘の築造方法と墳丘規模について土層観察から明らかにしようと試みた。まず、墳裾より東側に広がる平坦面の窪みから掘削を始めた。平坦面の窪みは、1層





7Tr



- 1 褐灰色土 (芝生による層) (表土)
- 2 黒褐色土 (シルト)
- 3 灰褐色土 (シルト、ややしまりあり)
- 4 灰褐色土 (にぶい橙色素土粒20%程度含む、2cm大の礫をやや多く含む)
- 5 にぶい橙色素土 (2cm大の礫を少し含む、灰褐色土粒を20%程度含む)
- 6 灰褐色土 (4層より土色暗い、5cm大の礫を多く含む)
- 7 橙色素土 (地山)

第11図 津古1号墳7トレンチ平面図・断面図 (S=1/40)

8Tr



- | | | |
|-----------------------------------------------------|---------------------------------------------|--------------------------------------------|
| 1 黒褐色土 (現代のゴミ穴用、空き缶等出土) | 10 にぶい黄褐色土 (灰黄褐色土粒5%程含む) (後世掘り込み) | 20 灰黄褐色土 (シルト) |
| 2 褐灰色土 (シルト、淡黄色土粒5%程混じる) | 11 灰黄褐色土 (9層より土色明るい、シルト) | 20' 灰黄褐色土 (10層より土色薄い) |
| 3 黄灰色土 (褐灰色土粒10%程混じる) | 12 灰黄褐色土 (11層より土色明るい) | 21 褐色土 (地山) |
| 4 灰黄色土 (シルト、サクサクしている) | 13 灰黄褐色土 (12層と同様の土色) | 22 黒褐色土 (旧表土) |
| 5 浅黄色砂 (黄灰色土10%程混じる) | 14 灰黄褐色土 (11層より土色暗い、シルト) | 23 にぶい褐色土 (10 cm程の礫多数含む、シルト) (地山) |
| 6 灰黄褐色土 (にぶい褐色土粒5%程混じる) | 15 にぶい褐色土 (灰黄褐色土粒10%程含む) | 23' 灰黄褐色土 (21層より礫が5 cm以下と小さくやや少なめ) (地山) |
| 7 浅黄色砂 (6層より土色濃い) | 16 にぶい褐色土 (灰黄褐色土粒10%程含む、15層より土色薄い) | ※1~7層は現代雑乱 |
| 8 にぶい褐色土 (こぶし大の礫含む、ややしまりあり、23層と似ているが、より土色が黄味がかっている) | 17 灰黄褐色土 (14層より土色明るい) | ※18・24・10・11・12・13・14・15・16・17・18層は後世の樹木攪乱 |
| 9 灰黄褐色土 (表土) | 18 灰黄褐色土 (17層より土色薄い) | |
| | 19 灰黄褐色土 (21層のものに類似している褐色土粒を10%くらい含む) (木の根) | |

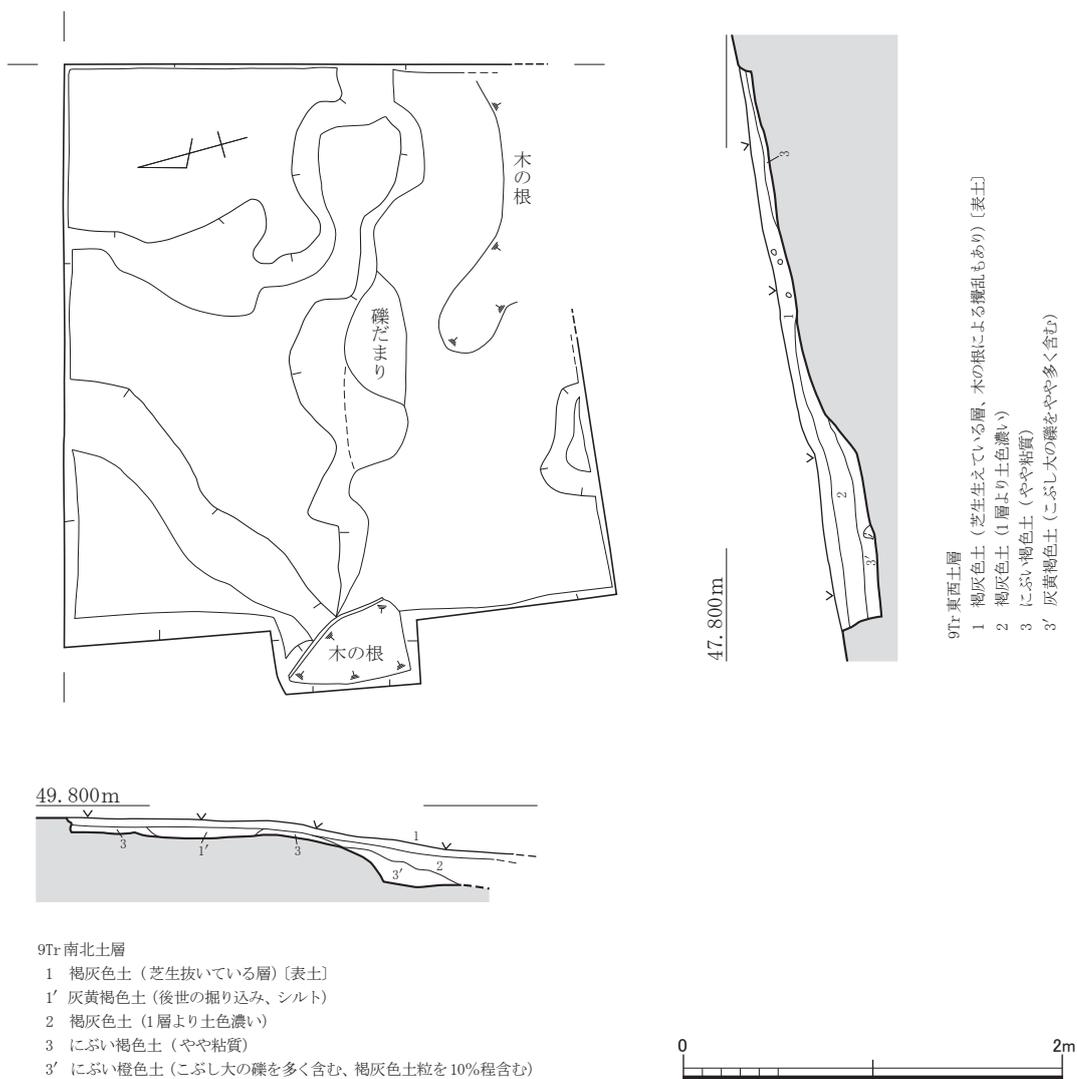


第12図 津古1号墳8トレンチ平面図・断面図 (S=1/40)

で空き缶等を含む現代のゴミが出土しており、3～7層にかけては真砂土で埋め戻している状態であった。一部8層が、地山である23層と類似しているように見えたが、土色の黄味が強いことから、一度地山を掘り返したのち、再度埋め戻した層と想定できた。この掘り込みは7・8層よりもさらに下側に向かって続いているが、現在のゴミ穴と判断できたことから、土層断面図で示した範囲で掘削を止めた。一方、墳頂側の状況については、トレンチの近くに樹木が植えられている影響か、10～12層のように樹木の植えられていた跡とも想定できる掘り込みを確認した。また、これらの掘り込みの周辺では、13～15層のように土層堆積からは盛土の可能性も残る状況を確認したが、土色は灰黄褐色土がベースであり、10～12層の土色とも類似すること、また16～18層の堆積状況から、積極的に盛土と評価はできなかった。

判然としない部分が多々あったことから、南側に幅20cm程度のサブトレンチを墳裾想定地点まで設定し、明確に地山と確認できるところまであえて掘削を行った。結果、墳頂側で22層の旧表土を確認しその直下で23層の地山を確認した。また、その他の墳丘上でも21・23層と当初想定した地山が広がった。以上から、現状としては墳頂は旧表土を検出できたことから盛土の可能性が残るものの、その他の墳丘では後世の削平が多いものの地山しか確認できないことから地山削り出しの可能性が想定できよう。なお、墳端は21層の東側の地山と接する面で傾斜が変化しており、この部分がちょうど現地表面でも墳端と想定した標高46.6m付近に一致することから、この部分が墳端の可能性が高いと考えら

9Tr



第13図 津古1号墳9トレンチ平面図・断面図 (S=1/40)

れる。また、墳裾より東側においては周溝と評価できる掘り込みを確認できなかったことから、この付近では周溝は無いと考えられるが、トレンチを設定できる長さが短かったため断定はできない。

なお、出土遺物はなかった。

9 トレンチ（第 13 図、図版 10・11）

9 トレンチは、前方部が撥型に広がると仮定した場合に前方部のコーナーが想定できる可能性のある地点に南北方向に約 3 m、東西方向に約 3 m で設定し、墳丘規模・形状を確認することを目的とした。現地表面で標高 47.2～47.7m のところに位置する。

トレンチ調査は表土の除去を中心とし、墳丘の規模・形状について土層観察から明らかにしようと試みた。現況として標高が緩やかに下る地点であり、トレンチ南東角には大木の切り株が所在した。墳頂側では約 10cm 地度で地山面に達した。トレンチ内では、南東側に大きな樹木の切り株があったことから、トレンチ内南側では木の根による攪乱を大きく受けていた。また、トレンチ内北西側では、灰褐色土の堆積層が堆積し、まるで前方部の撥型部分のコーナーが検出できたような形状を平面的には呈した。しかし、トレンチ内北西側の掘り込みに対しての傾斜が 1 トレンチにおける墳裾が削られた傾斜と類似しており、検出した地山面の様相も類似している。

以上から、一見前方部撥型部分のコーナーに見えた丘陵の盛り上がりは、後世のフェンス設置の際の土取りと木の根による攪乱により形成されたと考えられよう。また、トレンチ内の高低差が小さいことから表土の下で検出した地山を古墳の墳丘と捉えられると断定することは難しいと言える。

なお、出土遺物はなかった。

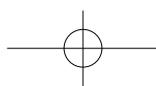
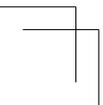
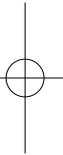
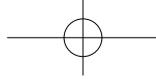
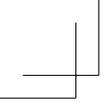
10 トレンチ（第 14 図、図版 11・12）

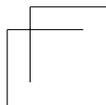
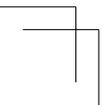
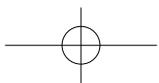
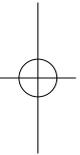
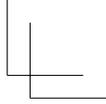
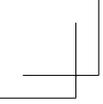
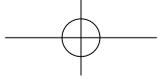
10 トレンチは、後円部と前方部の接合点であるくびれ部に南北方向約 6 m、東西方向約 2.5 m で設定し、墳丘規模、築造方法を確認することを目的とした。加えて、トレンチ北側では周溝の有無の確認のためさらに西側に 1 m 拡張し設定した。現地表面で標高 47.6～49 m のところに位置する。周辺は、公園利用の為か、現況での古墳の墳裾から西側にかけて大きく広がる平坦面を確認することができる状況である。

トレンチ調査は表土の除去を中心とし、墳丘の築造方法と墳丘規模について土層観察から明らかにしようと試みた。現況として、墳丘上に芝生が植えられており、この芝生からなる表土の直下が墳丘である。トレンチ内南側では、墳頂部において既に地山である 6 層の橙色土が露出しており、この地点から下る墳丘側では表土を剥いで深さ 10cm にも満たないところで地山である 6 層の橙色土を確認した。さらに、表土として堆積している 1 層の内、墳裾側で確認した 2～5 層では、現代のゴミ（波板状の屋根の破片、公園に設置してあるフェンスの金網の破片等）が出土した。一方で、トレンチ内北側では、墳頂部において既に地山である 7 層の橙色土が露出しており、この地点から下る墳丘側では 1～5 層が堆積していた。このうち、南壁土層断面 4 層と北壁土層断面 5 層は同一であり、上記のとおり現代のゴミが出土している。また、南壁土層断面図 5 層は 5 トレンチ 7 層の同じく現代のゴミが出土した層と一致する。以上のことから、10 トレンチの墳裾側は少なくとも公園のフェンスが設置された時点以降の現代の削平により削られた可能性が考えられる。

以上から、現状として削平を受けている範囲が広いため墳丘規模やくびれ部の形状について言及することは難しい状況である。しかし、旧表土を確認できておらず、墳頂部を中心に地表面で地山面が確認できていることを考慮すると、築造方法は地山削り出しと考えられよう。なお、墳裾より西側では、現代の攪乱による影響を大きく受けてはいるが、周溝と評価できる掘り込みを確認することができなかったことから、周溝は無いと考えられるが、トレンチを設定できる長さが短かったため断定はできない。

なお、時代を判別できる出土遺物はなかった。





第5章 まとめ

1. 津古1号墳確認調査の成果

<規模>

調査の結果、津古1号墳は全長 $40.6 + a$ m、後円部径約24.8m、前方部の長さ約 $15.8 + a$ mの規模を測ることが明らかとなった。1トレンチの土層観察より、前方部墳裾の下端が後世の削平により削られていることが判明したため、現状の傾斜角度等から1mも満たない範囲で現状よりも若干長くなる可能性が残る。よって、これまで津古1号墳の規格について纏向型前方後円墳との共通点がある可能性が指摘されることもあったが、今回の確認調査の結果より、畿内の典型的な初期前方後円墳である纏向型前方後円墳の規格にはそぐわないと判断した。一方、2002年に九州の初期前方後円墳を整理された久住氏により北部九州では墳形の規格が那珂八幡型を継承するものが多いことが指摘され、津古1号墳も那珂八幡型に該当する可能性がある古墳として分類された（久住2002）。今回の確認調査の結果より、津古1号墳の前方部の長さ「 $+ a$ 」の値が1m未満の場合、那珂八幡型の規格に類似するが、「 $+ a$ 」の値が1m以上の場合、那珂八幡型の規格から離れることとなる。現状、前方部の長さが1mも満たない範囲で若干長くなる可能性が残ることから、那珂八幡型古墳の規格に類似している可能性が高いと考えられる。

<築造方法>

津古1号墳は、三国丘陵の複雑に入り組む丘陵の先端に位置する。現状でも津古1号墳を保存している公園の北端に隣接する道路までの標高差は約11.8mあり、前期古墳の特徴である「形を整えるのに自然の地形を利用する」（堅田1993・岸本2012・土生田2014）という例にあてはまる。また、前方部を尾根の傾斜方向に向ける「前傾型」（前方部傾斜方向型）（田中2011の分類）であり、盛土量が少なくすんだ可能性が想定できる。

以上の情報を踏まえ、各トレンチの土層観察の結果から築造方法について整理を行う。

まず、後円部については、1・2・7トレンチの土層観察の結果から西側以外は地山削り出し、残る西側は3トレンチ墳頂部側のように墳丘として土量が不足する箇所盛土を行っていたことが判明した。また、第15図の復元図のように測量時に捉えた地形変換点は、復原ラインより西側に長く伸びた位置になったが、これは3トレンチの土層観察から盛土が施された箇所を中心に土砂の流出が進んだ結果、西側の墳丘をめぐる等高線が東側に比べ緩やかになったことが考えられよう。よって、確認調査を実施する以前は、後円部東側は墳丘の傾斜がきつく、風雨等による土砂の流出から墳形が抉れている箇所を一部確認していたことから残りが悪いと想定したが、上記のとおり確認調査で判明した西側の状況から、残りが良い箇所は東側と判断した。

次に、前方部については、1・4・8トレンチで検出した旧表土を手掛かりとした。4・8トレンチの土層観察から墳頂部において若干旧表土を検出でき、1トレンチの土層観察でも旧表土を検出した。1トレンチの旧表土の直上には、こぶし大の石を多数含む地山に非常に類似したにぶい橙色系～にぶい黄橙色系の土が堆積しており、土層観察から人為的な盛土の可能性が想定できることから、地山を削り出した際に出た土を不足する部分に盛った可能性も考えられるが、遺物が出土していないことから後世の盛土である可能性も残る。一方、墳頂部以外の大部分は削平を受けているところが多いものの、4・5・8トレンチの土層観察から、古墳築造後の後世の堆積層・攪乱層直下で地山を確認できたことから、地山削り出しにより築造されたと判断した。

次に、くびれ部については、5・10トレンチの土層観察から、墳裾は現代の削平により削られているため、築造方法は不明である。

最後に、周溝についてである。現状、古墳の墳裾から平地面にかけて長くトレンチを設定できる箇所は3トレンチのみであったが、周溝を確認できそうな地点に弥生時代の貯蔵穴が掘り込まれており、土層観察からは周溝と評価できる掘り込みは確認できなかった。よって、周溝は無い可能性が高いが、断定はできない。

以上より、津古1号墳は、地形を活かし墳丘の盛土を少量にして築かれた古墳と判断した。

<埋葬施設>

これまで埋葬施設は盗掘坑の部分に存在する可能性が高いと評価されてきた。よって、盗掘坑の部分に6トレンチを設定した。結果、サブトレンチ1で粘土槨の可能性が想定できる層を確認したが、確認できた範囲が狭く、かつ、大部分を攪乱による削平を受けていたため詳細は不明である。この掘り込みは現況面より深さ10cmの地点で確認した。これまで前期古墳の埋葬部分は墳頂の頂部から比較的浅い位置にあるのが特色であり、墳頂下1.5～2.0m前後のレベルに存在することが多い(大塚1998)と指摘されていることを踏まえると、現状よりさらに約2m程度の盛土がなされた可能性を想定しないといけな。津古1号墳の近隣に位置する津古2号墳・津古3号墳でも発見当時の時点で既に主体部がほとんど削平されていたこと、また、津古1号墳の後円部東側の斜面の傾斜を考慮すれば上記のような解釈も不可能ではないと考えられる。しかしながら、サブトレンチ1の状況のみで埋葬施設を語ることは難しく、断定することはできなかった。

<墳形>

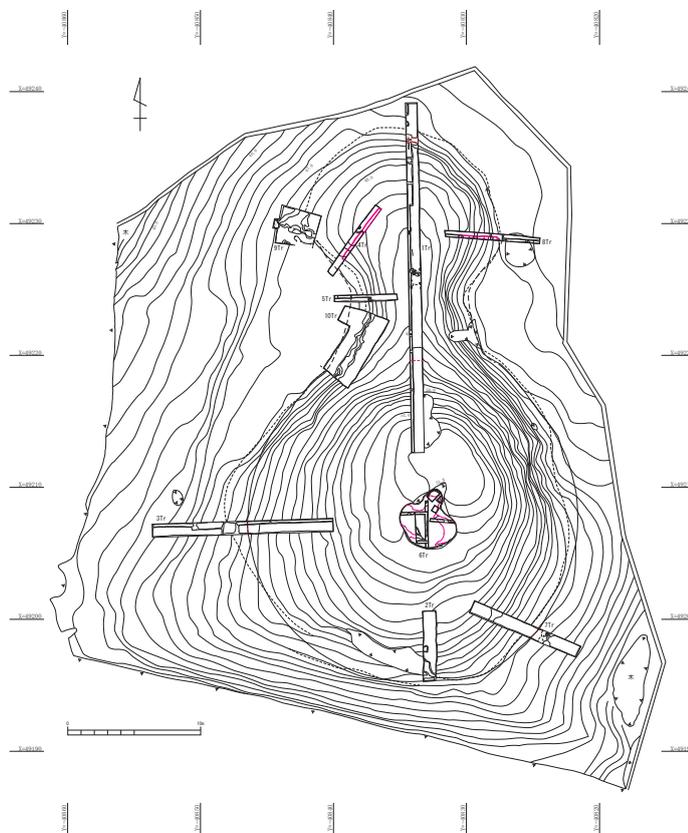
各トレンチ調査を実施する以前は、東側は墳丘の傾斜がきつく所々で地山が見えていたことから風雨等により土砂が流出している可能性を想定し、西側が古墳として残りが良い可能性が高いと考え、西側を中心にトレンチを設定した。しかし、前方部西側に設定した4・5・9・10トレンチの土層観察から、現代の削平により墳裾が削られているため、古墳の墳裾を確認できない状況であることがわかった。一方、前方部東側に設定した8トレンチでは、一部墳丘上に後世の掘り込み等があるものの墳裾の可能性が高いラインを検出し、後円部の状況も踏まえると、残りが良い箇所は東側と判断した。加えて、後円部と前方部の接続部分の形状について解明することはできなかったが、古墳東側に設定した7トレンチから8トレンチの間では至る所で地山が露出していた。墳丘の側面は地山削り出しで築造することが多いことを踏まえると、測量時に確認した墳端のラインが生きてくる可能性が高いことから、後円部と前方部の境はゆるやかなカーブを描き、墳端に向かって撥状に開く可能性があるかと判断した。

段築については、墳丘の至る所で削平箇所を確認しており、積極的に段築として確認できる箇所がないことから、不明である。

<築造時期>

津古生掛古墳・三国の鼻1号墳等が発見された当初、墳形の定型化・墳丘規模・埋葬施設・出土遺物の比較から、「津古生掛古墳→津古2号墳→三国の鼻1号墳」の系譜が提示された(片岡1996『小郡市史1巻』)。その後、久住氏による詳細な土師器の研究により津古2号墳が津古生掛古墳より古い時期と判断され(久住1999)、以後、「津古2号墳→津古生掛古墳→三国の鼻1号墳」の系譜が提示されている(久住2010、重藤2010・2012等)。津古1号墳は未調査であり、古墳に伴う遺物が発見されていないことから、従来、古墳の墳形から判断され、津古生掛古墳と三国の鼻1号墳の間に築造と捉えられている(重藤2010・2012等)。

上記4古墳の内、出土遺物より時期が判断できる3つの古墳の墳形について、まず、整理を行うと、津古生掛古墳は帆立貝式古墳、津古2号墳は前方部が低くて後円部径に対し



第15図 津古1号墳墳丘復元図 (S=1/500)

前方部の長さが短い前方後円墳と古い時期の前期古墳の特徴を示す点に特徴がある。一方、三国の鼻1号墳は津古2号墳と比較して前方部の長さが後円部径に対して長い前方後円墳であり、後円部と前方部のくびれ部の境に明瞭が見られる等、やや新しい時期の前期古墳の特徴を示す。次に、津古1号墳の古墳の形状は、確認調査の結果、津古2号墳と比較して前方部の長さが発達しており、三国の鼻1号墳の形状と比較してくびれ部がゆるやかで、後円部から前方部隅角に向かって撥状に開く可能性が想定できる等、三国の鼻1号墳より古い時期の前期古墳の特徴を示している。また、古墳の規格では、津古2号墳は纏向型前方後円墳の規格に近く、三国の鼻1号墳は、津古1号墳と同様に那珂八幡型古墳の規格に近い。

以上から、津古1号墳の築造時期は、重藤氏が述べられているように「津古1号墳は、津古生掛古墳と三国の鼻1号墳の間の時期に相当する」（重藤 2010）と考えられよう。

2. 津古1号墳と筑後地方における前期古墳の動向

津古1号墳確認調査の成果を基に、福岡県・佐賀県内における前期古墳の動向と比較検討を行うこととする。なお、下記で使用する古墳時代の時期区分は、『前方後円墳集成』（近藤編 1992）に依拠している。

(1) 三国丘陵における1期～3期の前期古墳の動向

三国丘陵では、古墳時代初頭より中期にかけて継続して首長墓系列の古墳が築造される。まず、津古古墳群とも総称される津古2号墳（1期）→津古生掛古墳（2期）→津古1号墳（2・3期）→三国の鼻1号墳（3期）が出現し、その後、鳥栖・基山地域の古墳との関連性が残る花笠2号墳（4・5期）→花笠1号墳（6期）と続き、再び三国丘陵東端の横隈山古墳（7期）へとつながる。福岡県内でも早くから前方後円墳が築造された地域の1つであり、首長墓系譜が続くことも、評価されてきた。墳形は、津古生掛古墳が帆立貝式古墳、花笠1号墳が円墳、花笠2号墳が前方後円墳の可能性も残る円墳であることを除けば、全て前方後円墳である。

同時期の三国丘陵におけるその他の墓制は、まず津古2号墳築造直後に方墳である津古3号墳が築かれた。その後、津古生掛古墳に伴い多くの方形・円形周溝墓が築かれ、宝珠川を挟んで北側の丘陵上に同時期の方墳である津古片曾葉1号墳が築かれた。周辺では、横隈狐塚遺跡・横隈上内畑遺跡・一ノ口遺跡等で弥生時代終末～古墳時代初頭の方形周溝墓が確認されている。また、平成23年に調査された津古永前遺跡では、津古1号墳のすぐ南側の丘陵頂部において、1期を中心に1期以前の可能性を持った墳丘墓が発見された。発掘調査時点で既に著しく削平されていたため、墳墓の全容はわからなかったものの、木棺墓・甕棺墓を主体部に持つ墳墓（1期以前）から一部西側に張り出すような円墳（1期）への推移が想定された（山崎 2017）。福岡平野の那珂八幡古墳周辺でも、同じく方形周溝墓が築造されている。こうした状況は、最古級の前方後円墳の祖型である箸墓古墳周辺における同時期の纏向勝山や纏向矢塚でみられる動向と類似していることが指摘（宮元・久住 2010）されている。

立地を見ても、前期古墳に該当する津古古墳群は、いずれも丘陵上に位置しており、非常に見晴らしが良い。前期古墳は眺望の良い場所に築かれる傾向がこれまでも多くの研究者によって指摘されている。また、津古1号墳・津古2号墳・津古生掛古墳は二日市地峡帯に向かって築かれ、三国の鼻1号墳は東側に広がる平野に向かって丘陵が飛び出した位置に築かれている。このことから、二日市地峡帯及びその北側に広がる福岡平野を意識して築かれた可能性が高いと考えられよう。

(2) 筑後地方における前期古墳の系譜及び動向

北部九州における古墳編年及び首長墓系譜に関する研究は、森氏の編年（森 1949）以降、調査成果・論文等から研究が深化していく。前期古墳については、出現時期・立地だけでなく次の2つの視点から論じられることが多い。1つは、定型化以前の古墳の特徴を示す「畿内型古墳（纏向型古墳）」に着目した研究（小田 1970 等）である。もう1つは、各古墳を規模や構造、出土遺物等から比較し、その位置づけを評価する研究である。代表的なものに、森氏による筑紫野・小郡古墳群としての整理・評

価（森 1983）や佐田氏の津古古墳群の系譜に対する問題提起（佐田 1987）、筑後地方全体における古墳等の評価を土師器の視点から行った柳田氏による研究（柳田 1982）、採用する古墳の形状から各地域の階層差に着目した研究（柳田 2001）等がある。2010年には、九州前方後円墳研究会により、筑後・肥前地方を重藤氏（重藤 2010・2012）、筑前地方を宮元氏・久住氏（宮元・久住 2010）によってその集大成が発表された。本項もこれらに依拠して考察を行うこととする。

まず、福岡県・佐賀県内における古墳の出現傾向についてまとめたい。1期には、これまで多くの研究者が指摘してきたように博多湾沿岸に多くの前方後円墳が築かれ（甘粕 1986、重藤 2012 等）、一方、有明海沿いの佐賀平野では吉野ヶ里古墳や赤坂古墳等前方後方墳が築かれており、古墳の取り入れ方が異なる。2期の古墳が出現する地域は1期に出現した地域を中心に広がるが、首長墓系列を追うことができるのは、津古2号墳から3期の三国の鼻1号墳まで系譜が続く津古古墳群、下町外畑古墳から宮地嶽古墳まで続く系譜、吉野ヶ里古墳から続く系譜のみであり、那珂八幡古墳は4期頃までその後継に該当する古墳が発見されておらず、可能性の提示でとどまっている。こうした状況は5期頃まで続き、首長墓系譜が安定しない場合が多いと指摘（重藤 2012、一瀬 2012）されている。5期・6期になると、八女古墳群のように、これまでほとんど古墳が築造されていない地域での古墳築造が開始される。

次に、三国丘陵の古墳群を含む筑後地方における前期の古墳の動向についてまとめたい。これらの古墳が位置する地域は、筑後川中流域の北側、脊振山系と三郡山地と耳納山系に囲まれた場所に位置し、地形等から「三国丘陵」「花立山周辺」「旧朝倉町」「旧甘木市」「基山・鳥栖」「久留米」「うきは」に区分可能である。なお、「三国丘陵」については1)で記している所以他について整理する。「花立山周辺」は、2期に前方後方墳である焼ノ峠古墳が出現し、ほぼ同時期に松尾古墳群で方墳と円墳が存在する。「旧朝倉町」は、2期に前方後円墳である下町外畑1号墳が出現するが、その前段階には外之隈Ⅰ区1号墳・Ⅱ区1号墳等の墳丘墓が築造される。そして3期の宮地嶽1号墳へと首長墓系譜が続く。「旧甘木市」は、1期末から2期に前方後円墳であり三角縁神獣鏡が出土した神蔵古墳が出現し、近隣には神蔵古墳の被葬者に関連する集団の墓域と考えられている方形周溝墓群が立野遺跡で発見されている。また、やや遅れて平塚大願寺方形周溝墓が築かれる。「基山・鳥栖」では1期に前方後方墳である赤坂古墳が出現するが、その後首長墓系譜は続かず、同じく「久留米」でも、2期に方墳であり三角縁神獣鏡が出土した祇園山古墳が出現するが、その後は5期に至るまで古墳は確認されていない。「うきは」でも、2期に前方後方墳である竹重1号墳が出現し、周辺に方墳である生葉1号墳が築かれた後は、5期に至るまで古墳は確認されていない。なお、上記をまとめた編年が第16図である。

以上から、津古古墳群が築造された1期～3期において、以下3点が指摘できる。

- ①津古古墳群は筑後川中流域周辺において最も早く前方後円墳を受容し、首長墓系譜を継続させた。
- ②津古古墳群が出現する時期には首長墓系列として前方後方墳を採用する地域も多い。
- ③津古古墳群出現以前に津古永前遺跡の墳丘墓が存在するように、他地域においても前方後円墳・前方後方墳が出現する前後や同時期において墳丘墓・方形周溝墓が存在する。

これらの背景には、津古古墳群の位置する三国丘陵が、西新町遺跡や比恵・那珂遺跡群を中心とした博多湾岸を貿易の中心（久住 2007）とし、畿内や朝鮮半島の首長と関係構築をしていた（重藤 2012）福岡平野と筑紫平野をつなぐ要衝である二日市地峡帯の一角を占めていたことが考えられる。津古古墳群の地理的な位置を評価した森氏は、前期古墳が集中する筑紫野や三国丘陵に筑紫君の本貫があり、5期以降に南下して久留米・八女古墳群を築いた可能性を指摘（森 1956）している。

以上のように、津古2号墳から始まる三国丘陵の首長墓系列は、各時期において最先端の技術を取り入れ、その時代の地域共同体の一翼を担っていたことがうかがえる。つまり、それだけ三国丘陵という土地が要衝であり、九州の統括に不可欠な場所であったことを表していると考えられよう。

(3) おわりに

津古古墳群を含めた三国丘陵は、三国の鼻1号墳の存在以降も花簞2号墳（4・5期）→花簞1号墳（6期）→横隈山古墳（7期）まで首長墓系譜が続く。福岡県・佐賀県内において1期より7期以降まで

首長墓系譜が続くものは、現時点では三国丘陵のみであることから、三国丘陵に出現した津古古墳群を含む首長墓系譜の特殊性がうかがえよう。その背景には、二日市地峡帯という地理的要因が大きく関係していたと考えられる。

<主要参考文献>*五十音順、報告書・市史は割愛

- 甘粕健 1986「古墳時代における筑紫」『文化と地域性』岩波講座日本考古学5 岩波書店
 一瀬和夫 2012「古墳文化—津々浦々」『古墳出現と展開の地域相』同成社
 大塚初重 1998「墳丘と内部構造の変遷の意義」『墳丘と内部構造』古墳時代の研究7古墳I 雄山閣
 小田富士雄 1970「磐井の反乱」『古代の日本』3 角川書店
 堅田直 1993『古墳』光文社
 岸本直文 2012「墳丘と周濠」『古墳時代 下』日本の考古学講座8 青木書店
 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究X I X』庄内式土器研究会
 久住猛雄 2001「九州における前期古墳の成立」『日本考古学協会 2002 年度榎原大会研究発表資料集』日本考古学協会 2002 年度榎原大会実行委員会編
 車崎正彦 2012「古墳の出現」『古墳時代 下』日本の考古学講座8 青木書店
 近藤義郎編 1992『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
 佐田茂 1987「九州における前期古墳の展開」『東アジアの考古と歴史』下 岡崎隆先生退官記念論集
 重藤輝行 2012「3 地域の展開 ②九州北部」『古墳出現と展開の地域相』同成社
 下垣仁志 2012「1 古墳築造の展開 ①古墳出現の過程」『古墳出現と展開の地域相』同成社
 田中裕 2011「前方後円墳の歴史」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学3 同成社
 波多野皖三 1975「津古遺跡群」『筑紫史論』第三輯
 宮元香織・久住猛雄 2010「筑前地方における首長墓系列の再検討」『九州における首長墓系譜の再検討』
 第13回九州前方後円墳研究会佐賀大会 九州前方後円墳研究会
 柳沢一男 1991「九州古墳文化の展開」『古代の日本』第3巻九州・沖縄 角川書店
 柳田康雄 1982「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻
 柳田康雄 1988「北部九州の出現期古墳とその背景」『古墳はなぜつくられたか』大和書房
 柳田康雄 2001「1 北部九州の前期古墳」『城山遺跡群IV』夜須町文化財調査報告書第54集 夜須町教育
 土生田純之編 2014『古墳の見方』ニューサイエンス社
 茂木雅博 1987『墳丘よりみた出現期古墳の研究』雄山閣
 茂木雅博 1998「5 規格と技術 2 築造技術」『墳丘と内部構造』古墳時代の研究7古墳I 雄山閣
 森貞次郎 1956「古墳文化から見た磐井の反乱」『考古学雑誌』41 巻3号
 森貞次郎 1983『九州の古代文化』六興出版

	小郡市	花立山周辺	旧吉井町	旧朝倉町	旧甘木市	久留米市	基山・鳥栖
1期	津古2号墳 津古3号墳 津古永前遺跡						赤坂古墳
2期	津古生掛古墳 津古片管葉1号墳	焼ノ畔古墳・松尾古墳群	竹重1号墳	外之隈遺跡	神蔵古墳 立野遺跡		紙園山古墳
	津古1号墳			下町外畑1号墳	大願寺遺跡		
3期	三国の鼻1号墳			宮地嶽古墳			

第16図 筑後地域における古墳時代前期（1～3期）の墓制の動向

*久住猛雄氏・宮元香織氏と重藤輝行氏が、2010年に第13回九州前方後円墳研究会で発表した際に用いた資料の表を基に作成した。



第17図 旧地形における三国丘陵の首長墓系譜古墳の立地